

### 和仏法律学校講義録

中村, 進午 / 塚田, 達二郎 / 中山, 成太郎 / 竹井, 耕一郎

---

(出版者 / Publisher)

和仏法律学校

(巻 / Volume)

1-8

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

1902-02-21

(明治三十四年十一月四日第三種郵便物認可 毎月二回  
明治三十五年二月二十一日發行)

三十五年度 第一學年



和佛法律學校講義錄

和佛法律學校發行

第八號



第一學年第八號目次

憲法 (百八五) 法學士 竹井耕一 耶

民法總則 (自第一章至五八九) 法學士 塚田達二 耶

民法物權 (自第一章至二二二) 法學士 中山成太郎

國際公法 (平時) (百八八) 法學博士 中村進午

雜報 ○取消權行使ノ方法○白耳義ノ資本額○懸賞討論問題○日英協約

090  
1902  
1-1-8

第二章 皇位繼承

依ルト此說ハ天皇民事上ノ行爲ヲ認ムルハ則チ可ナリト雖モ天皇ニ二人格ヲ認ムルハ不可ナリ公法ト曰ヒ私法ト曰フ學者カ便宜上之ヲ區別スルニ止マラズ法ハ素ト一ナリ隨テ天皇法律上ノ人格ハ一ナリトセサルヘカラス此一人格ノ下ニ公法上及ヒ私法上ノ行爲アリ得ト論スルカ適當ナリトモ皇位繼承ノ事ノ如キハ統治主體ノ組織ニ關スル大法ニシテ憲法ヲ論スルニ當リテ大體ヲ知ルノ必要アリ故ニ此處ニ説明セントス

皇位ノ繼承トハ何ソ簡箇ノ天皇カ代ヲ追フテ位ヲ繼カセラルルヲ稱シ法理上ヨリ言ヘハ簡箇ノ天皇カ統治ノ主體ヲ構成スル方法ヲ指スニ外ナラス外國ニテハ近頃ニ至ルマテ之ヲ以テ私法上ノ相續ト同一視シ皇室典範ハ皇室ニ關ス

憲法 天皇 皇位繼承

ル私法ナリト考ヘタリ然レドモ我國ニ於テハ皇位繼承ハ初ヨリ私法上ノ相續ト異ナリ權利ノ授受ニ非ス前君主ノ崩御ト共ニ皇嗣ハ國法上當然統治ノ權能ヲ取得スルモノナリ而シテ皇室典範モ亦一概ニ皇室ノ私法ト謂フコト能ハサルハ前ニ述ヘタル如シ

皇位繼承ニ關スル我國法上ノ原則ヲ舉クレハ大凡左ノ如シ

第一 現在ノ皇統ハ日本帝國ト始終スルモノニシテ此皇統ニシテ絶滅センカ日本國家モ亦絶滅スルコト

第二 各箇ノ天皇ハ崩御ニ由ルノ外皇位ヲ離レ給ハサルコト

第三 天皇崩御セハ皇嗣ハ當然皇位ヲ繼承シ給フコト

此等ノ原則ハ詳細ナル説明ヲ要セスト雖モ先ツ第一ノ原則ハ日本建國以來定マレル所ニシテ太祖ノ勅ニモ「瑞穗國是吾子孫可王之地」トアリ即チ太祖ノ皇統ト日本國家トノ相始終スルヲ示シ給ヒシニ外ナラス第二ノ原則ハ昔ヨリ行ハレタルモノニ非ス往時ニ在リテハ讓位ノ制度行ハレタルコトナキニ非ス然レトモ今日ノ國法トシテハ崩御ノ外位ヲ退キ給フコトナシトス第三ノ原則ニ關

シ感ハ言フ者アラン天皇崩御ノ場合ニハ皇嗣ハ即位ノ式ヲ行ヒテ後位ニ即カルルナリト然レトモ此式ハ法學上皇位繼承ノ要件ト謂フヘカラス皇嗣ハ前天皇崩御ト共ニ當然繼承シ統治ノ主體ヲ構成スヘキモノニシテ即位式ノ有無ハ問フ所ニ非ス古ヨリ所謂皇位ハ一時モ空シクスヘカラストハ法學上亦然リ皇位繼承ニ關スル重ナル原則ハ大凡右ノ如シ次ニ繼承ノ資格ヲ述ヘントス

繼承ニ必要ナル資格三アリ

第一 祖宗ノ皇統タルコト 即チ天照皇太神ヲ始祖トシ開闢以來日本國ヲ治メ給フ正統ノ後裔タルコトヲ要ス外國ニ於テハ養子ノ制度ヲ認ムルモノアレトモ我國ニ於テハ總テ實系ニ依ルコトトス皇室典範第四二條第五八條

第二 男系ニ出ツルコト 即チ皇男子ノ子孫タラサルヘカラス皇女子ノ子ニハ此資格ナキコトトス外國ニ於テハ之ヲ以テ資格ノ要件ト爲ササルアリ例ヘハ奧國ノ如キ是ナリ

第三 男子タルコト 即チ皇男子ノ子孫ニシテ男子タルコトヲ必要トス英國ノ如キハ前君主ト同等ノ系統ニ於テハ女子ハ男子ニ讓レトモ一層遠キ系統ノ



男子ニ對シテハ之ニ先チテ繼承スルノ權アリ  
 以上ノ外向ホ外國ニ於テハ繼承ニ必要ナル資格數件アリ即チ第一籍出タルコトヲ要ス我國法ニ於テハ之ヲ以テ要件トセス皇庶子孫モ亦繼承スルコトヲ得  
 第二皇室典範ニ由リ認メラレタル結婚ニ因リテ生レタルコトヲ要ス我皇室典範ニ依レハ皇族ノ婚嫁ハ勅許ニ由ルヘシト定ム故ニ勅許ナキ場合ニハ其出ハ庶子タリ而シテ庶出モ亦皇位ヲ繼承シ得ルコトハ既ニ述ヘタル如クナルヲ以テ  
 第二ノ點モ亦我國ニ於テハ要件トスル所ニ非ス第三對等ノ結婚ニ因リテ生スルコトヲ要ス我皇室典範ハ皇族ノ婚嫁ハ同族又ハ勅旨ニ由リ特ニ認許セラレタル華族ニ限ルト規定ス故ニ其他ノ場合ニ於ケル出生ハ總テ庶子タリ而シテ  
 此場合モ繼承ニ妨ナキヲ以テ畢竟第三ノ點モ亦我國ノ要件トスル所ニ非サルナリ第四國教ノ信者タルヲ要ス我國法ハ信教ニ關スル規定ヲ設ケス固テ亦繼承ノ要件ト看ルヘキニ非ス第五無能力ニ非サルコトヲ要ス我皇室典範ハ其第九條ニ皇嗣精神若クハ身體ニ不治ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ天皇ハ皇族會議及ヒ樞密顧問ニ諮詢シ繼承ノ順序ヲ換フルコトヲ得ト規定セリ故

ニ此第五ハ我國ニ於テモ繼承ノ要件ナルカ如シト雖モ仔細ニ論スレハ必スシモ然ラサルヲ知ルヘシ何トナレハ皇嗣ニ精神若クハ身體ノ重患又ハ重大ノ事故アリト雖モ天皇ニシテ變更ノ意アラセラレサル以上ハ決シテ資格ヲ失フヘキニ非ラレハナリ況ヤ天皇崩御ノ場合ニハ縱令此等ノ故障アリトモ皇嗣ハ當然位ニ即カセラルル外ナキニ於テヲヤ向ホ序ニ一言スヘキハ第九條ニ皇族會議及ヒ樞密顧問ニ諮詢シ順序ヲ換フルコトヲ得トアルカ故ニ此ノ如キ場合ハ死ニ角諮詢ヲ必要トスト雖モ皇族會議及ヒ樞密顧問ノ決議カ天皇ノ意思ヲ拘束ストノ趣意ニ非ス單ニ諮詢ニ止マルコトト知サラサルヘカラサルコト是ナリ

以上皇位繼承ノ資格ニ付テ説明セリ次ニ繼承ノ順序ヲ述ヘントス  
 繼承ニ關スル主義ヲ學者ハ大別シテ三種トス第一近親主義第二年長主義第三直系主義是ナリ第一ハ前代ノ君主ト血縁最モ近キ者カ繼承ス但同等ノ場合ニハ年長者ヲ先ニスルコトト爲ルヘシ第二ハ年齡ノ長セル者カ先ツ繼承スルノ主義ナリ第三ハ直系ヲ追フテ下ルノ主義ナリ我國法ニ於テハ直系主義ヲ原則

トシ加フルニ近親主義及ヒ年長主義ヲ以テス其順序ヲ舉ケルハ先ツ皇長子ニ始マリ皇長子ナケレハ皇長孫ニ下ル此ノ如クシテ其子孫皆在ラ  
 テレハ皇次子及ヒ其子孫ニ及ヒ以下之ニ準シテ進ムモノトス總テ皇子孫ノ繼  
 承ハ嫡出ヲ先ニシ嫡子孫皆在サルニ至リテ庶子孫ニ移ルコトトス若シ皇子孫  
 ニシテ皆在ラサルトキハ最近親タル皇兄弟ニ及ヒ直系ヲ逐フテ其子孫ニ下ル  
 此等ニシテ皆在ラサルハ次ノ近親タル皇伯叔父及ヒ其子孫ニ傳ヘ此等モ亦皆  
 在ラサルハ其以上ニ遡リテ近親ノ皇族ニ傳フ皇兄弟以上同等内ニ於テハ同シ  
 ク嫡ヲ先ニシ庶ヲ後ニス而シテ年長主義ニ依リ長ヲ先ニシ幼ヲ後ニスルハ無  
 論ナリトス

以上ノ順序ハ全ク變更ヲ受ケサルニ非ス既ニ述ヘタル如ク皇嗣精神若クハ身  
 體ニ不治ノ眞患アルカ又ハ重大ノ事故アルニ當リ天皇ハ法定ノ手續ヲ經テ之  
 ヲ換フルコトヲ得ルカ故ナリ

繼承ノ順序ニ關連シテ重要ナル問題ト爲ルヘキハ天皇崩御ノ際皇子胎内ニ在  
 ラセラルルノ推定アル場合ニハ何人カ皇位ヲ繼承スヘキヤノ點ニ在リ先ツ胎

中ニ皇子アラセラルト推定スルモ其皇子ニ繼承ノ資格アリヤ否ヤ資格アリト  
 スルニハ其皇子ハ皇男子ナルコトヲ推定セサルヘカラス何トナレハ我國法ニ  
 於テ女子ハ繼承ノ資格ナケレハナリ尙ホ胎中ノ皇子ハ生活ノ力ヲ具ヘラルル  
 コトモ推定セサルヘカラス然ルニ以上三種ノ推定ハ何レモ分明ナリ難シ  
 然ラハ胎中皇子ニ繼承ノ資格ナシトセンカ前天皇崩御ト共ニ胎中皇子ヲ超ニ  
 テ次ノ順位ニ當ラセラルル皇族カ即位シ給フコトト爲ルヘシ然ルニ若シ胎中  
 ノ皇子御誕生而モ皇男子ナラハ如何先ノ即位者ハ之ニ對シテ位ヲ讓ルヘキカ  
 然レトモ讓位ハ我國法ノ認メサル所タリ  
 之ニ關スル學說ヲ大別スルトキハ二種ニ岐ル(一)胎中皇子ニ繼承資格アリトス  
 ル説(二)胎中皇子ニ繼承ノ資格ナシトスル説是ナリ

第一説ハ胎中皇子ヲ男子ト推定シ且其利益ノ爲メニ既ニ生レタルモノト看做  
 シ尙ホ其理由トシテ皇位ニ對スル紛争ヲ避クルコトヲ得ヘシト論スルモノ  
 之ニ對シテハ下ノ如ク批難ヲ試ムルコトヲ得ヘシ(一)右ノ説ハ全ク推定假想ノ  
 ミニ基ク何トナレハ先ツ胎中皇子ノ存在ヲ假定シ次ニ其皇子ヲ男子ト假定シ

タルモノナルノミナラス向ホ生活力ヲ具有セララルルコトヲモ假定セザルヘカ  
ラサレハナリ(二)胎兒ノ利益ノ爲メニ既ニ生レタルモノト看做ストハ民法上ノ  
變例ナリ之ヲ以テ直チニ皇位ノ繼承ニ適用スヘカラス蓋シ二者全ク其性質ヲ  
異ニスルハ既ニ違ヘタル所ナリ即チ皇位繼承ハ胎中皇子ノ利益ニ供スル所以  
ニ非サルノミナラス民法ノ場合ハ胎兒ノ男女ヲ問ハス總テ之ヲ適用スルコト  
ヲ得レトモ皇位ノ繼承ノ場合ハ大ニ異ナレリ(三)若シ胎中皇子出生シ給ヒタル  
モ男子ニ非サル場合又ハ生活力ヲ有セザリシ場合ニハ出生マテノ間皇位ヲ空  
シクシタルノ結果ト爲ルヘシ或ハ曰ク此場合ハ次順位ノ皇族位ニ即キ其即位  
ノ效力ハ先帝崩御ノ時ニ遡ルト看レハ可ナラント或ハ曰ク出生マテハ男子ト  
推定スルモ出生セラレタル上ニテ其推定ノ誤レルコトヲ知レハ直チニ次順位  
ノ皇族即位スレハ差支ナシト然レトモ此等ノ說ニ依レハ出生マテハ皇位曖昧  
ナリトノ批難ヲ免レス而シテ事際其間ニ不測ノ禍ヲ生スルノ虞ナキニ非ス(四)  
此說ハ之ニ由リテ皇位ニ對スル爭ヲ避タルコトヲ得然ルニ若シ反對ニ胎中皇  
子ニ資格ナシトセハ次ノ順位者カ先ツ即位スヘシ然レトキハ後ニ要リ皇男子

出生セハ茲ニ順位ノ爭ヲ生スル恐アリト云フニ在ルヘシト雖モ此點ハ第二說  
ヲ末段ニ於テ述フル所ニ從ヘハ之ヲ避タルコトヲ得ヘキナリ(五)然レモ此點  
尙ホ此說ニ從ヘハ胎中皇子ヲ繼承資格アリト推定スルカ故ニ攝政ヲ置クノ必  
要ヲ生スヘシ何トナレハ天皇未成年ノ場合ニ相當スヘケレハナリ然ルニ此推  
定ハ全ク誤ルコトアルヘキハ前ニ述ヘタル如クナルヲ以テ攝政ヲ置クモ亦觀  
ニ屬スルコトアルヘキハ明カナリ(六)然レトモ其間ニ皇位繼承ノ事ハ皇位  
第二說 胎中皇子ニ繼承ノ資格ナシトスルモノニ此說ハ更ニ二說ニ岐ルニ  
(一)ハ降誕マテノ間ハ資格ヲ有セス皇男子降誕シテ始メテ降祚シ給フト論ス而  
シテ降誕マテハ如何ニスヘキニ付キ更ニ其說岐ル(イ)或ハ曰ク其間ハ攝政ヲ  
置クヘシト然レトモ先ツ攝政ハ天皇ナケレハ存セザルモノニシテ此說ニ依レ  
ハ胎中皇子ニ繼承資格ナシトスルカ故ニ攝政モ開始シ得ザル道理ナリ又次  
此說ノ如クシテ降誕マテハ皇位ヲ空シテセザルヘカラス蓋シ二者全ク其性質ヲ  
攝政ノ必要ナシ先帝崩御ト共ニ次順位ノ者即位シ皇男子降誕キ其位ヲ讓ルヘ  
シト然レトモ讓位ハ我國法ノ認メザル所タリ畢竟(一)ノ說ハ不十分ナリトノ請

ヲ免レズ。...

(二) 絕對ニ胎兒ノ繼承資格ヲ認メザルノ説ナリ即チ先帝崩御ト共ニ胎中皇子ノ有無ヲ論セス次順位者位ニ即キ後ニ皇男子降誕スルモ之ニ譲ルノ必要ナシト論ス此説ハ最モ明白ニシテ先ウ皇位ノ曖昧ヲ避ケ推定假想ヲ排シ尙ホ讓位等ノ疑義ヲモ防キ得ヘキニ似タリ...

以上予ハ想像シ得ヘキ各種ノ説ヲ舉ケ之ガ批評ヲ試ミタリ尙ホ茲ニ皇位繼承ノ章ヲ終ルニ臨ミ附言スヘキコトアリ皇室典範ニ依レハ皇位繼承ト共ニ神器ヲ承ケ更ニ即位ノ禮ヲ行ハセラルルコトヲ規定ス蓋シ神器ハ歷代ノ天皇ニ非テレハ之ヲ受クルコトヲ得スト雖モ神器ヲ受クルコト其レ自身ハ憲法上皇位繼承ノ要件ト謂フヘカラス皇嗣ハ神器ノ授受ニ拘ハラヌ國法上當然皇位ヲ繼承スルモノタリ次ニ即位ノ禮モ亦然リ然レトモ或學者ハ神器ハ統治主體ノ存スル所ヲ證明シ即位ノ禮ハ以テ皇嗣ヲ即位ラカニ證明スト論ス然レトモ是レ畢竟憲法ト皇室典範トノ性質ヲ明カニ區別セザルモノ起ルノ論ニ過キス憲法論トシテハ前述ヘタル如クナル...

### 第三編 臣民論

既ニ述ヘタル如ク統治權ハ人ニ對ス純粹ナル統治ノ客體ハ臣民ナリ今日ニ於テハ外國人ニ對シテモ統治權ノ效果ヲ及ホスコトアリト雖モ外人ハ統治ノ組織ニ缺クヘカラサルモノニ非ス之ニ反シテ臣民ハ一國統治ノ組織ノ必要元素ナリ統治者ト臣民トアリテ國始メ成立シ而シテ外人ハ之ニ與ラサルナリ...

#### 第一章 臣民ノ本質

臣民ノ本質ニ關シテハ學說種種アリ今其大略ヲ舉ゲントス...

(甲) 臣民ハ一國ノ居住者ナリトスル説 此説ハ純粹ナル屬地主義ニ據ル即チ甲國ニ居住スル者ハ甲國人ニシテ乙國ニ居住スル者ハ乙國人ナリトスルモノナリ此主義ハ往時ニ在リテ行ハレコトナキニ非サレトモ今日ハ固ヨリ行フヘカラス...

(乙) 臣民ハ一國ノ國籍ヲ有シ其國ニ居住スル者ナリトスル説 此説ハ甲國ニ...

似テ屬地主義ニ出ツト雖モ甲説如ク單ニ住居ノミヲ臣民ニ要素トセズ之ニ加フルニ其國籍ナカルヘカラスト爲ス此説モ亦行フヘカラサルノ論ナリ何トナレハ國法上及ヒ國際法上一國臣民ハ其本國ヲ離ルルモ當然臣民分限ヲ失フヘキモノニ非サレハナリ法ニ於テモ明カニ臣民ノ居住移轉ノ自由ヲ認ムル所ナリ

(丙) 臣民ハ永久ノ居住者ナリトスル説 此説モ居住ノ點ヨリ觀察ス然レトモ前二説ト異ナリ臣民タル者ハ永久ノ居住者ナラサルヘカラス之ニ反シテ外人ハ一時ノ居住者タリト説ク例ヘハ佛國流ノ法制ニテハ外人ニテモ十年間佛國ニ居住スレハ佛國民ト看做スカ如シ然レトモ此主義モ漸ク廢セラレントシ我國法ノ如キ外人カ長ク帝國ニ住居スル場合及ヒ臣民カ永ク外國ニ居住スル場合モ臣民分限得喪ノ原因ト爲ラサルナリ

以上ノ三説ハ主トシテ住居ノ點ヨリ觀察スト雖モ未ダ臣民ノ本質ヲ表明スルニ足ラス是ニ於テカ權利及ヒ義務ノ方面ヨリ觀察スルニ至レリ先ツ權利ヨリ觀察スル説ヲ述ベ

(丁) 臣民トハ外人ノ享有シ能ハサル權利ヲ享有シ又少クトモ此ノ如キ權利享有ノ資格アル者ヲ謂フ例ヘハ參政權ノ如キハ原則トシテ臣民ノミ之ヲ有シ外人ノ有スルコト能ハサルモノナリト論ス然レトモ今日各國ノ法制ハ外人ト雖モ特別ノ場合ノ外ハ總テ權利ヲ享有セシムルコトヲ認ム殊ニ私權ニ付テハ我民法ニモ規定セル如ク法令若クハ條約ニ於テ特ニ禁セサル限ハ臣民ト同一ニ一切ノ權利ヲ享有スルコトヲ得セシム次ニ公權ニ關シテモ絕對ニ之ヲ禁ズルニ非ス唯性質上許スコト能ハサルモノニ限リテ外人ヲ除外スルノミ參政權ノ如キモ絕對ニ之ヲ禁ズルモノニ非ス例ヘハ名譽領事ノ如キ是ケリトス又一方ヨリ觀察スレハ臣民ト雖モ總テ外人ノ有セサル權利ヲ有スト論スルコト能ハス例ヘハ女子ノ如キハ私法上ハ無能力者トシテ公法上モ亦種種ノ權利ヨリ除外セラル故ニ臣民ト外人トノ區別ヲ權利ノ種類ニ依リテ爲サントスルハ抑モ難シ畢竟外人ノ有スル能ハサル如キ權利ハ或ハ臣民ノ常素ト謂フコトヲ得ヘント雖モ要素ト謂フコト能ハス

(戊) ハ義務ノ方面ヨリ觀察スル説ナリ 此説フ中ニ於テハ臣長官以外ハ均

擔セサル義務ノ負擔者ナリト云フ説ト(二)臣民ハ外人ト異ナリ永續的ノ義務具  
有スル者ナリト云フ説トアリ先ツ

(一)説ハ例ヘハ兵役ノ義務ノ如クハ外人ハ負擔セザルモノニシテ臣民ノミ之  
ノ負擔此種ノ義務ヲ有スルハ臣民ノ特色ナリト爲ス謂之ニ對シテハ先ツ外人  
ノ負擔ハサルモノト然ラザルモノトハ境界ハ何レニ在リヤ其説明不十分ナ  
リ次ニ臣民ト雖モ其本國ニ在ラザルトキハ本國國家ニ之ニ義務ヲ負ハシト  
コト能ハサル場合アリ其場合ハ此説ニ依レハ臣民ト外人トノ區別ヲ爲シ難  
向ホ次ニ同シク臣民ニテモ外人ト同シク兵役等ノ義務ヲ負ハサル者アリ女子  
老若幼者及ヒ法人ノ如キ是ナリ左レハ義務ノ種類ヲ以テ臣民ト外人トヲ區別  
スルハ抑モ難シ既ニ(一)説ノ下ニ述ヘタル如ク外人ノ有テサル義務ハ臣民ノ常  
素トシテ得ヘケレトモ要素ニ非ズトシテハ(二)説ノ下ニ述ヘタル如ク外人  
(二)説ハ臣民ハ永續的ノ義務者ナリト爲スモノナリト此説ハ義務ノ種類ニ依リ  
テ論スルニ非ズ義務繼續ノ期間ノ永久ナルト否ト依リテ外人ト區別セントス  
ルナリ即チ臣民義務ハ永續的ナレトモ外人ハ他國ニ在ル間一時的ノ義務ヲ具

テノミト説ク然レトモ臣民ト雖モ必スシモ永續的義務者ニ非ス例ヘハ海外ニ  
居住スル者ニ對シ本國方義務ヲ負ハシスルノ手段ナキ場合ノ如其間ハ義務  
中斷ス即チ永續セサルナリ左レハ此點ヲ以テシテモ外人ト區別ヲ爲スコト難  
シトス

此ノ如ク權利及ヒ義務ニ依ルモ十分ニ本質ヲ説明スルコト能ハス故ニ更ニ根  
本ニ遡リテ之ヲ探究スルトキハ蓋シ臣民ハ臣民タル所以ハ其身分ニ在リテ存  
ズ詳言スレハ臣民トハ統治者ニ對スル絕對服從者タル身分ヲ有スル者ニナリ  
權利及ヒ義務ノ如キハ此身分ヨリ生シ來ル結果ナリトス臣民ト異ナリテ外人  
ノ服從ハ絕對的ニ非ズ有限的ナリ他國ノ領土ニ在ル間ニ於テ自己ノ本國ニ對  
スル絕對服從身分ト衝突セザル範圍ニ於テノミ存在ス

服從身分ハ臣民ヲ通シテ一律ナリ然レトモ服從ノ方法即チ權利義務ノ關係ハ  
法令ノ定ムル所ニ依リ各ニ様ナラス此種ノ法令ハ皆國家ノ意思ニシテ時ト處  
ト人トニ依リ常ニ變更シ得ヘキモノナリトス

日本ニ國體ニ對シテハ  
臣民ノ本質ヲ章ヲ終ルニ臨ミ一言スヘキハ臣民ハ自然的人類ノミテ權利

スルカ又ハ法人モ亦之ヲ包含スルヤノ問題ナリ普通ニ國民ト云フハ自然的人類ノミヲ稱スルニ似タリ然レトモ學問上ヨリスレハ日本ニ國籍ヲ有スル法人ノ同シタ臣民ニ準テ論スルヲ至當ナリト考ス

以上臣民ノ本質ヲ説明セリ次ニ其義務及ヒ權利ヲ説明セント欲ス

### 第二章 臣民ノ義務

臣民ノ義務ハ其絕對服從者タル身分ニ基キテ發ス故ニ之ヲ外人ノ義務ト比スルニ大ニ異ナルモノアリ外人ト雖モ臣民ト同種類ノ義務ヲ負フコトアレトモ是レ其身分ヨリ當然生シ來ルニ非ス他ノ理由即チ主トシテ公平便宜ノ理由ニ基タモノナリ右述ヘタル如クナルカ故ニ臣民ハ外人ノ負擔スヘカラザル義務モ亦之ヲ負擔スルコトアルハ當然ナリ

義務ノ種類ハ法令ノ定ムル所ニ從ヒテ種種アリ臣民ノ中ニ於テモ必スシモ一様ナラス然ルニ普通學者ハ之ヲ概括シテ理論的ノ區別ヲ試ム今其二三ヲ舉グ

#### 第一 行爲義務及ヒ不行爲義務

即チ或事柄ヲ爲ス積極ノ義務ト或事柄ヲ爲ササル消極ノ義務トノ別ナリ此區別ハ誤ナシト雖モ學問上價值少シ

#### 第二 精神的義務肉體的義務及ヒ物品の義務

精神的義務ト肉體的義務トハ多ク相伴フモノタリ何トナレハ二者ハ離ルヘカラザル關係ニ在ルヲ以テナリ次ニ物品の義務トハ納税ノ義務ノ如キヲ謂フ此區別モ亦誤ナシト雖モ憲法ニ於テ一之ヲ説明スルコト能ハス

#### 第三 服從義務及ヒ忠誠義務

此區別ハ多數ノ國法學者ノ認ムル所タリ例ヘニ「ラバンド」「ザイデル」如キ然リトス其說ニ曰ク臣民ハ國家ニ對スル絕對服從ノ義務ト其國ノ不利益ヲ避ケ利益ヲ増進スヘキ義務即チ忠誠ノ義務トノ二ノ義務ヲ負フ外人ハ服從ノ義務ヲ有スルコトアレトモ忠誠ノ義務ニ至リテハ之ヲ外人ニ望ムヘカラス二者相兼スルハ臣民ノ特色ナリト論ス此說ニ對シテ「ポルンハック」及ヒ「ゲオルグ・マイエル」ノ如キハ論シテ曰ク服從ノ義務ヲ認ムルハ可ナリ然レトモ忠誠ノ義務ニ至リテハ法律上ノ義務ニ非ス寧ロ道德ノ範圍ニ屬スヘキモノナリト

予ハ先ツ服從義務ニ關シテ學者ノ注意ヲ請ハントス蓋シ絕對服從ト云フハ臣民ノ身分其モノニシテ此身分ヨリ生ズル義務ニ非ス身分ト其結果タル義務トヲ混同スヘカラス蓋シ身分ハ臣民ヲ通シテ常ニ一定不動ナリ義務ニ至リテハ法令ノ定ムル所ニ從ヒ變動シ得ルモノタリ次ニ忠誠ノ義務ニ關シテハ「ボルンハック」等ノ如ク一概ニ道德上ノモノニシテ法學上ノモノニ非スト云フヘカラス何トナレハ法ハ屢國民ノ忠誠ヲ要求スルコトアレハナリ然レトモ又他ノ學者ノ如ク法ノ規定ヲ離レテ汎ク漠然ト忠誠ヲ以テ國民ノ義務ナリト論スルハ穩ナラス

予ハ此處ニ於テハ概括的ノ區別ヲ爲サス唯憲法ニ規定スルモノニ就テ一其說明ヲ試ミントス

(甲) 兵役ノ義務 憲法第二十條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有スト」兵役トハ帝國ノ戰鬥力組織ノ一部ニ該リ内國ノ秩序維持及ヒ外國ニ對スル攻守ノ場合ニ一身ヲ抛テテ國ノ爲メニ盡スノ役務ヲ謂フ此種ノ義務ハ絕對服從ノ身分ヲ有スル臣民ニ非サレハ負擔シ得ス故ニ外人ハ原則ト

シテ此義務ナシ古ハ兵役ヲ外人ニ強制シタルコトアリ又強制ヲ用ヒス外人ヲ傭入レテ兵役ニ使用セシコトアリ然レトモ此等ハ理論上不可ナリト謂ハサルヲ得ス何トナレハ外人ハ絕對服從者ニ非サルカ故ニ在任國ハ之ニ對シ一身ヲ抛テテ己ニ盡スノ義務ヲ強制スルコト能ハサルト共ニ外人モ其本國ニ對スル絕對服從ノ身分ヨリシテ他國ノ爲メニ一身ヲ投スルコト能ハストスルヲ至常トスレハナリ

終ニ注意スヘキハ本條ニ「兵役ノ義務」トアルハ兵役ニ就クヘキ義務ヲ稱シ既ニ兵役ニ就テ後軍隊ノ統率權ニ對スル義務ハ別ニ軍隊ノ紀律ニ依ルヘキモノニシテ法律ヲ以テ規定スヘキ限ニ在ラサルコト是ナリ

(乙) 納税ノ義務 憲法第二十一條ニ曰ク「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有スト」所謂税トハ財政上ノ收入ヲ計ルカ爲メニ無償無條件ニテ人ノ資産ヲ徵收スルヲ謂フ之ニ依レハ先ツ税ハ財政上ノ收入ヲ計ルカ爲メニス故ニ他ノ目的ニ使用スルモノナレハ租税ニ非ス次ニ無償無條件ナラサルヘカラス例ヘハ手数料ノ如キハ報酬ニ屬シ罰賦金ノ如キハ事業ノ費用ヲ分賦スル



モノニシテ總テ租税ニ非サルナリ  
 此義務ハ兵役義務ノ如ク國民一般ニ負擔セシムルヲ原則トシ兵役義務ヨリモ  
 一層廣ク外人モ亦之ヲ負擔スルヲ妨ケス何トナレハ此義務ハ外人ノ身分ト軋  
 觸スルモノニ非ナレハナリ且今日各國ニ於テハ往時ト異ナリ外人ヲ度外視セ  
 ス之ニ權利ヲ與ヘ保護ヲ行フカ故ニ縱令其國民ニ非ストモ其國統治ノ費用ヲ  
 分擔スルハ至當ノ事ナリトス但此場合ニ租税ヲ以テ保護ニ對スル報酬ト考フ  
 ヘカラス若シ租税カ報酬ナラハ二者ハ相比例シテ増減スヘシト雖モ租税ハ素  
 ト保護ノ多少ニ拘ハラズ國家ノ權利トシテ國費ヲ取立ツル所以ニシテ必スシ  
 モ保護ノ程度ト比例セス現ニ憲法ニ於テモ其第六十二條ニ租税ト報償ニ屬ス  
 ル手数料トヲ明カニ區別セリ  
 租税徵收ノ方法ハ一般ニ亘リ平均ニ賦課スルヲ原則トス  
 外人ハ納税ノ義務アルヲ原則トス然レトモ一切ノ場合ニ於テ然リト謂フコト  
 ヲ得ヘキヤ否ヤハ疑問ノ存スル所タリ例ヘハ乙國カ甲國ト戰端ヲ開クニ當リ  
 軍費募集ノ目的ヲ以テ租税課スル場合ニ乙國在留ノ甲國人ニ對シテモ課税ス

ルコトヲ得ルヤ否ヤ一説ニ曰ク外人ハ原則トシテ納税ノ義務アリ故ニ特別ノ  
 目的ヲ限ルコトナクシテ課税スル場合ハ論ナク縱令特別ノ目的カ存在スル場  
 合モ亦課税スルコトヲ得ヘキナリ外人ハ税額費消ノ道ヲ問フノ權利ナキカ故  
 ニ總テノ場合ニ納税ノ義務アリト謂ハサルヘカラスト  
 然レトモ外人カ他國ニ在留スルノ間ニ於テモ本國ニ對スル絕對服從者タル身  
 分ハ依然タリ此身分ニ軋觸セサル限度ニ於テ他國ノ國權ニ服スルノミ此限度  
 以外ニ於テハ他國國權モ服從ヲ強フル能ハサルト共ニ外人モ之ニ服從スヘカ  
 ラス此點ヨリ觀察スルニ一般普通ノ課税ハ毫モ外人ノ身分ト軋觸セスト雖モ  
 若シ其目的カ己ノ本國トノ戰爭ニ限定セラルルトキハ之ヲ負擔スルハ本國ニ  
 對スル臣民ノ身分ト相容レサルニ至ルヘク隨テ在留國モ之ヲ強ゾルノ道理ヲ  
 有セサルナリ  
 畢竟理論トシテハ課税ノ目的カ限定セラレルトキニ當リ其目的ノ如何ニ依リ  
 テ論結ヲ異ニスルコトアルヘキナリ  
 次ニ問題ト爲ルハ憲法ノ規定ニ日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務

ヲ有ストアリテ外人ノ場合ヲ定メタルカ故ニ外人ニ對スル課税ハ必スシモ法律ヲ要セスト論スヘキヤ否ヤノ點ナリ先ツ法律ヲ要ストスル論者ハ左ノ二點ヨリ論斷ス(一)憲法ノ規定ハ其性質外人ニ及ホシ得ヘキモノハ之ヲ適用スルヲ徑當トス納税ノ義務ニ關スルコトノ如キ是ナリ(二)憲法第六十二條ニ於テ「新ニ租税ヲ課シ及税率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ヘシト定ム此規定ハ日本臣民ノミニ限リタルモノニ非ス廣ク課税ノ方法ヲ定メタルモノナリ故ニ外人ノ場合モ此中ニ包含セラレト此論固ニ一理アリ然レトモ先ツ第一ノ點ニ於テ憲法ハ主トシテ日本臣民ニノミ適用スヘキ趣意ナルコトハ發布ノ詔勅ニ依ルモ明カナルノミナラス憲法第二十一條ニ於テ明カニ「日本臣民下限定セルカ故ニ之ヲ擴メテ外人ニ適用スヘシト云フハ徑當ナラサルニ似タリ次ニ第二ノ點ニ於テモ憲法第六十二條ハ第二十一條ト範圍ヲ異ニスルモノニ非ス一ハ臣民義務ノ方面ヨリ規定シ一ハ會計ノ手續ヨリ規定シタルマテニテ兩者其内容ヲ同シウス故ニ第六十二條ヲ第二十一條ヨリ廣ク解釋シ外人課税ノ場合ヲモ包含スト看ルハ徑當ナラスト謂フコトヲ得ヘシ之ニ依レハ外人ニ對スル課税ハ

必スシモ法律ヲ要セサルノ論結ト爲ルナリ  
以上兵役及ヒ納税ノ義務ヲ略説セリ此二種ノ義務ヲ通シテ一ノ問題アリ即チ臣民ノ兵役及ヒ納税ノ義務ハ法律ニ依リテ始メラ生スルモノナリヤ又ハ憲法上此等ノ義務ハ存在スレトモ唯義務ノ程度及ヒ其方法等カ法律ニ依リテ定マルト看ルヘキヤ否ヤノ問題はナリ或人ハ法律ノ存スルナクハ義務其モノモ存在セスト論ス然レトモ憲法ニ於テ明カニ此義務ヲ認ムル以上ハ法律ハ唯憲法上ノ義務ノ程度方法等ヲ定ムルモノト看ルヘキカ如シ此等ノ義務ニ關シテハ臣民ハ法律ノ外其程度方法等ヲ定メラレサルノ保障ヲ有スト謂フコトヲ得ヘシ

### 第三章 臣民ノ權利

臣民ノ權利ヲ述フルニ先チ權利ノ意義ニ付テ一言ヤントス之ニ關スル學說古來一ナラス今一一此處ニ説述スル能ハス唯大要ヲ摘メハ學說ヲ大別シテ三種トス(一)意思説(二)利益説(三)折衷説是ナリ意思説ヲ主張スル者ハ曰ク權利トハ法ニ由リテ與ヘラレタル意思ノ力ナリト利益説ヲ主張スル者ハ曰ク權利トハ法

ノ保護スル利益ナリト云フ折衷説ニハ種種アリ予モ亦此種ノ論者ニ屬シ權利トハ法ニ依リ主張シ得ヘキ行為ノ範圍ナリトス主權ニ對シテ國民ノ權利ヲ分チテ公權及ヒ私權ト爲スハ一般學者ノ認ムル所ナリ而モ其區別ノ標準ニ關シテハ學說一定キス最モ普通ナル學說ニ依レハ公權下ハ公法上ノ權利ナリ私權トハ私法上ノ權利ナリト云フニ在リ予ハ此處ニ於テ詳細ナル議論ヲ爲スコト能ハサルカ故ニ姑ク普通ノ説ニ從ヒテ説明スヘシ

或學者ハ曰ク公權ハ國家ノミ之ヲ有シ臣民ハ國家ニ對シテ權利ヲ有セス何トナレハ國家ト臣民トハ權力服從ノ關係ニ立ツヲ以テナリト又或學者ハ曰ク公權ハ臣民ノミ之ヲ有ス國家カ臣民ニ對スルハ權力ニシテ權利ニ非スト然レトモ此等ノ説ニハ承服シ難シ先ツ前説ニ對シテハ縱令國家ト臣民トカ權力服從ノ關係ニ立ツト雖モ國家カ一旦法ニ由リ自己ノ行動ヲ限定シ臣民ニ行動ノ力ヲ與ヘタル以上ハ臣民モ亦公權ヲ有シ得ヘキハ無論ナリト論スルヲ得ヘシ次に後説ニ依レハ國家ハ權力ヲ有シテ權利ヲ有セスト云フト雖モ權力ノ行使ハ法學上權利トシテ論スルモ何ノ差支ナシト謂フコトヲ得

項第一號乃至第三號ノ行為ヲ爲スコトヲ得ヘシ

第一 夫ノ生死分明ナラサルトキ 夫カ不在ニシテ而モ生死分明ナラサル場合ニ於テハ結局夫ノ許可ヲ得シト欲スルモ不可能ノ事ニ屬シ且一方ハ妻自ラ獨立シテ法律行為ヲ爲スヘキ必要アルヲ以テナリ

第二 妻カ遺棄セラレタルトキ 夫カ妻ヲ遺棄シタル場合ト雖モ離婚ニ必要ナル手續ヲ盡ナサル以上ハ夫婦ノ關係ハ依然トシテ存在スルヲ以テ未タ夫權ヲ脫スルコトヲ得スト雖モ事實上夫タル義務ヲ盡テ妻ノ利害ヲ顧ミサル夫ヲシテ妻ノ爲ナシトスル行為ノ監督ヲ行ハシムル必要ナキヲ以テ夫ノ許可ヲ得ントスルモ不能ノ場合多クハナリ

第三 夫カ禁治産者又ハ準禁治産者ナルトキ 夫自身カ辨別力ニ乏シキカ爲メ無能力者タル宣告ヲ受ケタルモ妻ノ爲メニ之ヲシテ妻ノ行為ト夫權トノ關係ヲ判斷セシメシトスルモ到底望ムヘカラサル事項ナルヲ以テナリ

第四 夫カ瘋癲ノ爲メ病院又ハ私宅ニ監禁セラレタルトキ 此場合ニ於テハ夫ノ妻ノ爲メシテ夫ノ行為ノ利害得夫ヲ判別スル辨別力ナキヲ通例トスレバナリ

第五 夫カ禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ其刑ノ執行中ニ在ルトキハ一年以上ノ獄中ニ在リテ世間ノ消息ニ通セザル夫ニ對シ許可ヲ請フカ如キハ妻ニ於テ甚ク不利益ナレハナリ

第六 夫婦ノ利益相反スルトキハ或行爲ヲ爲スコトカ夫婦相互間ノ利害ヲ異ニスル場合ヲ稱スルモノニシテ例ヘハ夫婦共有物ノ分割ヲ請求スルカ如キ妻ノ行爲ハ夫ノ利益ヲ害シ隨テ夫ノ欲セザル事項ナルニ拘ハラス尙ホ其許可ヲ要スヘキモノトセハ妻ハ殆ト夫ノ意思ニ反シテ夫ニ對シテ自己ノ權利ヲ主張スルコトヲ得ザル結果ト爲リ法律カ夫婦財產制ヲ設ケ其財產ノ所屬ヲ判然タラシムル立法ノ趣旨ヲ貫徹セザルニ至ルヲ以テナリ

夫カ未成年者ナルトキハ妻ニ對シテ法定ノ許可ヲ與スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ裁判所カ許可ヲ與フル制ヲ採用スル立法例アリ然レトモ一家ノ事ニ關シ裁判所ヲシテ成ルヘク干與セシメザル可ナリト信ス若シ法律上何等ノ規定ナキトキハ未成年ノ夫ト雖モ獨斷ニテ妻ニ對シテ許可ヲ與フルコトヲ得ヘキモノト解釋セザルヘカラス何トナレハ妻ニ對シテ與フル許可ハ夫權ニ伴フ

モノニシテ未成年者モ亦夫權ヲ有スル點ニ於テハ成年者ニシテ妻アル者ト異ナル所ナケレハナリ唯立法論トシテハ未成年者自ラ或行爲ヲ爲スニ當リテハ法定代理人ノ同意ヲ要スヘキニ同一種類ノ行爲ニ付キ妻ニ對シテハ獨斷ニテ之ヲ許可スルコトヲ得ヘシトセハ彼此權衡ヲ失スルモノト謂ハサルヘカラス故ニ白耳義ノ法律ニハ夫カ未成年者ナルトキハ妻ノ爲サントスル行爲ニ付キ行爲能力ヲ得テ而シテ後許可シ得ヘキモノトセリ我民法ニ於テハ夫カ未成年者ナルトキハ法定代理人ノ同意ヲ得ルニ非サレハ妻ノ行爲ヲ許可スルコトヲ得ストセリ第一八條然ラハ未成年ノ夫カ法定代理人ノ同意ヲ得テ許可シタル妻ノ行爲ヲ取消スニ當リテハ獨斷ニテ爲スコトヲ得ヘキカ又ハ法定代理人ノ同意ヲ要スヘキカ法律ニハ之カ規定ヲ缺クト雖モ解釋論トシテハ其許可ヲ取消又ハ制限モ法定代理人ノ同意ヲ要スルモノト斷定セザルヘカラス何トナレハ一タヒ與ヘタルモノヲ奪フニハ之ヲ與フルト同一ノ力ヲ要スヘキモノナレハナリ或ハ民法第十六條ハ概括シテ夫ハ其與ヘタル許可ヲ取消シ又ハ制限スルコトヲ得ト規定セルヲ以テ之ヲ除外セザル限ハ未成年ト成年タルトニ關係

ナク得モ夫タ以上ニ其與ニ之ヲ許可ヲ取消スルコトヲ得ルハ其論スル者ノ所  
 へシト雖モ第十六條ノ單ニ夫ヲ許可ヲ取消シ又ハ制限ヲ得ル者トシテ規定セ  
 シニ過キスレテ未成年ノ夫モ獨斷ニテ之ヲ爲シ得ヘキト又規定メタルニ非ス  
 隨テ獨斷ニテ許可ヲ與ヘ得ヘキ夫ハ獨斷ニテ之ヲ取消シ得ヘク法定代理人ノ  
 同意ヲ得テ許可スヘキモノハ亦其同意ヲ得テ許可ヲ取消シ得ヘキモノト解セ  
 ナルヘカラス

第五項

無能力者カ法律ノ規定ニ依ラスシテ  
 獨斷ニテ爲シタル法律行為及ヒ之ニ對

スル相手方ノ權利

無能力者カ法律ニ定メラレタル許可又ハ同意ヲ經スシテ爲シタル法律行為ハ  
 無効ニ非スシテ取消シ得ヘキモノナリ而シテ此取消權ヲ行使シ得ヘキ期間ハ  
 無能力者カ能力者ト爲リシ時ヨリ五年若クハ法律行為ヲ爲シタル時ヨリ二十  
 年第一二六條トセルカ故ニ相手方ハ此期間中ハ何時其法律行為ヲ取消サルヘ

キカラ豫知スルコトヲ得ス其結果自ラ取得セシ權利モ何時取戻サルルヤ測リ  
 難ク隨テ財產ノ改良及ヒ融通ヲ阻害シ國家經濟上ニモ少カラサル不利益ヲ與  
 フルニ至ルヘシ故ニ現行ノ立法例ニ於テハ取消シ得ヘキ法律行為ノ運命ヲ成  
 ルヘク速ニ決セシムヘキ途ヲ開ケリ即チ相手方ヲシテ取消シ得ヘキ行為ヲ追  
 認スルコトヲ得ル者ニ對シ其行為ヲ追認スルヤ否ヤヲ確答スヘキ旨ヲ催告シ  
 之ニ依リテ其行為ノ效力ヲ決定セシムルニ在リ(第一九條)

民法ハ何故ニ相手方ノ催告ニ對シ自己ノ單獨ノ意思ヲ以テ完全ニ追認ヲ爲シ  
 得ヘキ者例ヘハ無能力者ノ法定代理人若クハ夫カ法定ノ期間内ニ確答ヲ發セ  
 ナルトキハ其行為ヲ追認シタルモノト看做シ之ニ反シテ保佐人ノ同意又ハ夫  
 ノ許可ヲ得テ追認スヘキ者又ハ法定代理人カ特別ノ方式例ヘハ親族會ノ同意  
 ヲ得テ追認スヘキ場合ニ於テハ追認ヲ爲スヘキ者カ法定ノ期間内ニ特別ノ方  
 式ヲ踐ミタル通知ヲ發セタルカ若クハ法定期間内ニ保佐人ノ同意又ハ夫ノ許  
 可ヲ得タル旨ヲ通知セタルトキハ其行為ヲ取消シタルモノト看做スルカ是レ自  
 己單獨ノ意思ヲ以テ追認ヲ爲スコトヲ得ル者カ相手方ヨリ行為ヲ取消スルヤ否

ヤノ催告ヲ受ケ之ニ對シテ確答セサルハ行爲ヲ取消スル意思ナキモノト認ムルコトヲ得ヘシ且追認スヘキ行爲ハ取消サルルマテハ有效ニ成立セルモノナカレカ故ニ之ヲ取消サント欲セハ自ラ進ミテ其意思ヲ明カニセサルヘカラス即チ相手方ノ催告ヲ受ケテ其意思ヲ表示セサル以上ハ其法律行爲ノ成立ヲ望ムモノナリト認メタルニ因ル之ニ反シテ自己ノ單獨ノ意思ヲ以テ確答ヲ發スルコトヲ得サル場合ニ於テハ一定ノ方式又ハ手續ヲ踐ミ始メテ追認スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ追認スルノ意思アルトキハ必ス此方式又ハ手續ヲ踐マサルヘカラス然ルニ無能力者又ハ法定代理人ニ於テ追認ニ必要ナル條件ヲ充テサル以上ハ追認スルノ意思ナキハ明カナリ故ニ此場合ニ於テハ其行爲ヲ取消シタルモノト看做スヲ至當ナリトス

**第六項 詐術ヲ用ヒテ能力者タルコトヲ信セ**

無能力者自ラ能力者カリト詐ルモ相手方ニ於テ相當ノ注意ヲ爲スドキハ能力者タルト否トノ區別ヲ爲スコトヲ得ヘキヲ通例トスルカ故ニ無能力者ノ詐

信シ之ト取引シタル相手方ハ寧ロ相當ノ注意ヲ缺キタル者ナルヲ以テ之ヲ保護スヘキ必要ナシト雖モ無能力者ヲ單ニ能力者ナリト主張スルノミニ非スシテ進ミテ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ或手段ヲ用ヒタルトキハ之ヲ信スルハ當然ニシテ之ヲ信シタル者ニ於テ過失アリト謂フコトヲ得ス寧ロ無能力者ニ於テ不法行爲アルモノナリ例ヘハ詐欺ノ戶籍謄本ヲ以テ妻ニ非サルコトヲ證明シ又ハ成年者ナルコトヲ詐ルカ如シ然ルニ其法律行爲ハ事實無能力者カ爲シタルモノナルヲ以テ無能力者ニ於テ之ヲ取消シ得ヘキモノトセハ詐欺ヲ爲シタル者カ詐欺ニ因ル法律行爲ヲ取消スコトヲ得ルト同シク不法行爲者ヲ保護スルト同一ニシテ却テ公ノ秩序ヲ亂ルモノナリ蓋シ無能力者ノ利益ハ公ノ秩序ヲ亂シテマテ之ヲ保護スルノ必要ナキヲ以テ法律ハ此場合ニ於テハ其行爲ニ付キ無能力者ニ取消權ヲ與ヘス民法第二十條ハ無能力者ニ其行爲ノ取消權ヲ與ヘサルニ過キスシテ其行爲ヲ絕對ニ有效ト爲シタル規定ニ非サルカ故ニ相手方ニ於テ之ヲ取消スコトヲ得ルヤ否キハ詐欺ニ因ル意思表示ノ理論ニ依リテ之ヲ決定セサルヘカラス而シテ理論トシテハ相手方ハ詐欺ニ因ル

意思表示ヲ爲シタル者ナルヲ以テ之ヲ取消シ得ヘシト雖モ相手方ハ固ヨリ其  
行爲ノ有效ヲ期スル者ナルヲ以テ之ヲ取消スルモ實益ナキヲ以テ事實問題  
トシテハ相手方ヨリ其行爲ヲ取消スコト辦カルヘシ

### 第三款 住所

住所ノ意義ヲ一定スルハ法律上種種ナル關係ニ於テ效用ヲ有スルモノナリ例  
ヘハ債務ノ履行地ヲ明示セザルトキハ債權者ノ住所ヲ以テ履行地トスルカ如  
キ第四八四條、商法第二七八條債權ノ讓渡ニ關シ第三者ニ對スル效力ハ債務者  
ノ住所地法ニ依ルカ如キ(法例第一二條)國籍ヲ有セザル者ニ付テハ其住所地法  
ヲ以テ本國法ト看做スカ如キ(同第二七條)又裁判所ノ土地ノ管轄カ住所ニ依リ  
テ定マルカ如キ(民事訴訟法第一〇條、第一四四條、第一四五條)非訟事件手續法第  
二條第三四條、第三八條、第九〇條乃至第九二條爲替手形ニ支拂地ヲ記載セザリ  
シトキハ其手形ニ記載シタル債務者ノ住所地ヲ以テ支拂地ト爲スカ如キ(商法  
第四五二條)其他手形關係ニ於テハ住所ハ種種ナル適用ヲ有ス(同第四七二條)第

四九〇條、第四九一條、第四九四條、第五一五條)而シテ住所ハ人ト直接ニ關係スル  
モノナルヲ以テ民法中ハ説明スル章ニ於テ之ヲ述ブルヲ要當トス(意思  
第一條)住所ノ意義ニ於テハ(一)一、住所ノ實質ニ依リテ事實上ノ住所ニ對シ  
民法ハ住所ヲ定ムルニ原則トシテ本籍主義ヲ採リ本籍ノ在ル處ヲ以テ住所  
トセシモ(人事編第二六二條)是レ事實ニ依ラズシテ單ニ形式ニ拘泥シ實際ハ便  
否ヲ觀テモノナリ何トナレハ(本籍地ハ)往住有名無實ニシテ事實上其地以外ニ  
生活スル者アルヲ以テナリ元來住所ハ家族ト共ニ生活シ又ハ業務ヲ營ビ生  
活ノ根據地ト爲スノ狀態ヲ備ヘテハ(一)一、我國從前ノ本籍地ハ右ノ如キ事  
實アリシモ維新以來人民各地ニ集散シテ生活ノ途ヲ求メ本籍地ト生計ノ重要  
地ト一致セザル者鮮カラサル今日ニ於テハ本籍地ヲ以テ住所地ト爲スルヲ得ル  
ルハ論ヲ埃タス故ニ民法ニ於テハ本籍主義ヲ採ラズシテ事實ニ依リテ住所又  
定メ生活ノ本據即チ中心ニ在ル所ヲ以テ住所トスル主義ヲ採リ之ヲ第二十一  
條ニ規定セテ獨逸民法ハ各人ノ定住セル場所ヲ以テ住所トスト規定シ其主義  
ニ於テハ我民法ト異ナルコトナシ(獨逸民法第七條)所謂生活ノ本據事實法克ト

シテハ屢味ニシテ住所ノ意義ヲ明カニスルニ困難ナラト購モ之ヲ事實ニ照シ  
 其意義ヲ解釋シテ左ニ住所ノ要件ヲ述ブルハ(イ)或場所ヲ生活ノ根據地トスルノ意思(ニ)一定ノ場所ニ繼續シテ滞在シテハ  
 (イ)或場所ヲ生活ノ根據地トスルノ意思(ニ)一定ノ場所ニ繼續シテ滞在シテハ  
 ハトク未タ以テ其處ニ住所ヲ定ムル意思アリト謂フコトヲ得ス例ヘハ學生カ  
 勤學ノ爲メ一定ノ場所ニ數年滞在スルカ如キ見物又ハ或職務ヲ爲メ一定ノ場  
 所ニ滞在スルカ如シ此等ノ場合ニ於テハ或目的ヲ達スルカ爲メ一定ノ地ニ  
 居所ヲ定メタルニ過キスシテ本人自ラ其地ヲ以テ自己ノ生活ノ根據地ト爲  
 ノ意思ナキヲ以テ繼續シテ滞在セル事實ヲ以テ之ヲ以テ直テニ住所ヲ設定シ  
 タリト謂フコトヲ得ス之ヲ要スルニ一定ノ場所ヲ以テ生活ノ中心地トシ居住  
 スル意思ヲ有シ始メテ住所ヲ設定スルニ必要ナル要件ヲ備フ所モ之ヲ謂フ  
 (ハ)前項ノ意思ヲ表示スルコト 一定ノ場所ヲ生活ノ根據地ト爲スノ意思ヲ  
 有スルモ之ヲ表示セズハ住所ヲ設定シ得ズト謂フコトヲ得ス而テ此意思  
 表示ハ明示タルト默示タルト開示之ヲ認識スルニ足ル事實ヲ以テ十分ナ

テ自由ナル判断ヲ以テ之ヲ決定スルキモ不尤也但此妨害ノ來ラン所ハ或  
 アルコトハ法律ノ保護ヲ要スルノ程度ニ於テ其存在スルコトヲ必要トス此程  
 度ハ亦裁判官ノ自由ニ判断スル所ナリ(イ)或ハ積極的ニ其妨害ノ起ラサルタケ  
 占有保全ノ訴ノ主張スル所ハ原告ヲシテ無害ナラシムルニ在リ故ニ占有ニ對  
 スル妨害ノ豫防ヲ求ムルコトヲ主張ス其手段トシテハ(一)或ハ其妨害ノ生スル  
 原因ト爲ル物ノ排除ヲ求ムルコトアリ(二)或ハ積極的ニ其妨害ノ起ラサルタケ  
 ノ設備ヲ爲サシムルコトヲ求ムルコトアリ(三)或ハ妨害カ發生シタルトキニ生  
 スヘキ損害ヲ賠償スルノ擔保ヲ得テ事後ニ無害ナラシメントスルコトヲ求ム  
 ルコトアリ以上ノ三者ハ此訴ノ主張スル所ナリ而シテ占有保全ノ訴ハ性質ハ  
 他ノ訴ト同シク占有權ノ保護タルニ於テハ同一ナリト雖モ唯異ナル所ハ他ノ  
 訴ハ事後ノ救済ヲ目的トスルト雖モ占有保全ノ訴ハ事前ノ豫防ヲ目的トスル  
 コト其特性ナリ(イ)或ハ其妨害ノ起ラサルタケノ設備ヲ爲サシムルコトヲ求ム  
 占有保全ノ訴ニ付テモ亦一定ノ期間アリ此期間ハ即チ左ノ如シ(第二〇一條第  
 二項) 占有權ノ效力 占有保護



(一) 占有權ニ對スル妨害ノ發生スルノ危害ノ存スル間ニ止マル是レ當然ノコトニシテ此危險アルニ由リ訴ヲ提起スルモノナルヲ以テ其危險ノ消滅シタルトキハ亦此訴ヲ提起スルノ必要ナシ

(二) 占有ノ妨害ヲ生スルノ危害カ工事ニ因ル場合ニ於テハ其期間ハ一層短縮セラル即チ(イ)其工事ニ著手シタル後一箇年ヲ經過スルトキハ此訴ヲ提起スルコトヲ得ス(ロ)此工事落成スルトキハ亦此訴ヲ提起スルコトヲ得ス其理由ハ占有保持ノ訴ノ期間ヲ設ケタルト同一ノ理由ニ據ル

第三 占有回收ノ訴

占有回收ノ訴トハ占有者カ其意思ニ反シテ不法ニ其占有ヲ奪ハレタルトキニ提起スルコトヲ得ル訴ニシテ其占有ノ回復ヲ求メントスルモノナリ故ニ此訴ハ三箇ノ目的ヲ有ス(一)占有權ヲ確認セシムルコト(二)占有ヲ奪ハレタル物ノ返還ヲ求ムルコト(三)之ニ依リテ生シタル損害ノ賠償ヲ求ムルコト是ナリ

占有回收ノ訴ノ要件左ノ如シ(一) 奪取ニ當リ其時ニ必要ナル損害(二) 原告カ占有權ヲ有セシコト(三) 是レ占有訴權ノ根本的要素ナリ此要件ナク

シハ占有回復ノ訴ヲ提起スルヲ得サルハ明カナリ(四) 損害ニ當リテ是レ損害賠償ノ要件ニ依リ原告ノ占有カ他ニ移テタルコト(五) 此要件ハ此訴ニ特ニ要スル要件ニシテ換言セバ原告カ被告ノ行為ニ因リ所持ヲ失フノ謂ナリ其所持ヲ失フノ原因ハ被告ノ行為ニ因ルコトヲ必要トスレトモ必スシモ被告自身ノ行為ナルコトヲ要セス或ハ被告カ他人ヲシテ之ヲ爲サシムルコトアリ或ハ被告カ他人ト共同シテ之ヲ爲スコトアリ之ヲ要スルニ原告ハ被告ノ行為ニ因リテ其占有ヲ他ニ移テタルニ由リ被告ニ對シテ其回收ノ訴ヲ提起スルモノナリ

(三) 其占有ヲ移テタルコトハ原告ノ意思ニ反シ且不適法ナルコト 此要件ハ占有回收ノ訴ニ最モ必要ノモノナリ何トナレハ原告ノ意思ニ反シテ占有ヲ移シタル場合ニ非サレハ占有ヲ奪ハレタリト謂フコトヲ得サレハナリ例(ハ)原告カ錯誤又ハ過失ニ因リテ占有ヲ他ニ移シタルトキハ是レ原告ノ意思ニ因リ占有ヲ移シタルモノニシテ所謂占有ヲ奪ハレタル場合ニ非サレハナリ又占有ヲ奪ハレタル場合ナリト雖モ適法ノ原因ニ依ルトキハ此訴ヲ提起スルコト

ヲ得サルナリ例ハ執達吏カ差押ヲ爲スカ爲メニ其占有ヲ奪フ如キ是ナリ故ニ占有回復ノ訴ニハ不適法ノ原因ニ依リ占有ヲ奪フコトヲ要ス又以上ノ三者ハ占有回復ノ訴ノ要件ナリ而シテ損害賠償ヲ求ムル場合ニハ此他被告ニ故意若クハ重大ナル過失アルコトヲ要ス又占有回復ノ訴ノ要件ニ於テハ此訴權ヲ認メタル其範圍類ル狭少ナリシ即チ(一)不動産ノ占有ニ限ルモノトシ(二)其占有ヲ奪フコトハ必ス被告ノ暴力ニ基クコトヲ要ストセリ羅馬帝政ノ時代ニ至リテハ稍ヤ其條件ヲ緩クシ占有ヲ奪フコトハ必スシモ被告ノ暴力ニ因ルコトヲ要セズ被告ノ不法行為ニ因ルヲ以テ足レリトセリ而モ尙ホ其占有ノ目的物ハ不動産ノミニ限ルトセリ蓋シ當時ハ占有ヲ保護スルノ思想未タ今日ノ如ク盛ナラザリシヲ以テ回復訴權ヲ付與スル如キハ不動産ノ占有ニ限ルヘキモノト認メタレハナカズ中古ニ至リ「カノン」法及ヒ獨逸法ノ影響ヲ受テ占有回復ノ訴ヲ認ムル範圍漸ク擴大セラレ第十七世紀ニ至リテハ遂ニ「スボリエ」シクラー「ゲ」名ノ下ニ其範圍ヲ頗ル廣メラレタリ即チ(一)動産及ヒ不動産ノ占有ニ限ラス弘ク此訴權ヲ

認ム(二)訴權發生ノ原因ハ不法ニ占有ヲ奪ハレタリト云フニ在リトシ羅馬法ニ於ケル如ク暴力ニ基クコトヲ必要トセザリキ(三)此訴ハ人訴權ナリトシ不法ニ占有ヲ奪ヒタル人及ヒ其惡意ノ承繼人ニ對シテノミ之ヲ主張スルコトヲ得トセリ此ノ如ク「スボリエ」シクラー「ゲ」ハ羅馬法ニ於ケル占有回復ノ訴ト大ニ異ナレリ然ルニ第十八世紀ニ至リ占有權ノ根本觀念ニ付テ種種ノ學說紛起セルヤ其影響ヲ受ケ其訴權ヲ認ムル範圍ヲ狹メントスルノ傾向ヲ生セリ例ヘハ「ア」ビニ「」如キハ羅馬法ニ於ケル如ク占有回復ノ訴ハ必ス被告ノ暴力ニ基クコトヲ必要トスト曰ヘリ是レ「サビニ」ト「方」占有ヲ保護スルハ暴力ニ對スル救済ナリトスルノ説ヲ採リタル結果ナリ故ニ第十九世紀ノ後年ニ於テ占有權ニ關スル學說ノ研究層一層ヲ進メ「サビニ」等ノ學說排斥セラルルニ至ルモ遂ニ占有回復ノ訴ヲ認ムル範圍ハ漸ク舊ニ復シ「スボリエ」シクラー「ゲ」ト同一ノ程度ニ於テ之ヲ認ムルニ至レリ蓋シ占有ヲ保護スルハキモ「トセ」ハ占有カ不法ニ奪ハレタル場合ニハ其原因ノ何タルモ其占有ノ目的物ノ何タルトモ同キ之ヲ保護スルヲ當然トスレハナリ是ヲ以テ我民法モ亦占有回復ノ訴ハ「スボリエ」シク

「イダ」同一ノ範圍ニ於テ之ヲ認メタルナキハ古昔同然トシテモ、  
 占有回收ノ訴ノ性質ハ如何是レ亦占有ヲ保護スルノ訴ナルハ言フ埃タアル  
 此訴ノ特性ハ對人訴權ナリ沿革ヲ按ズルニ此訴ハ羅馬法ニ於テハ對人訴權ニ  
 シテ即チ暴力ヲ加ヘタル人ニ對シテノ之ヲ提起スルコトヲ得ルモノトセリ  
 編造法ニ於テモ亦スボリニ「イダ」ハ對人訴權ニシテ不法ニ占有ヲ奪  
 タル人及ヒ其惡意ノ承繼人ニ對シテノ之ヲ主張スルコトヲ得トセリ我民法  
 モ亦占有回收ノ訴ヲ以テ對人訴權ナリトシ不法ニ占有ヲ奪ヒタル者及ヒ其  
 一般承繼人並ニ惡意ノ特定承繼人ニ對シテノ之ヲ提起スルコトヲ得トセリ  
 (第二〇〇)能參照蓋シ占有回收ノ訴ハ被告カ不法ニ占有ヲ奪ヒタルコトヲ原因  
 トシテ提起スルモノナルヲ以テ其性質自ラ對人訴權タルモノナリ或ハ此訴ヲ  
 以テ物上訴權ト爲シ侵害者及ヒ其惡意ノ承繼人ニ限ラズ弘クテ何人ニ對シ  
 テモ提起スルコトヲ得セシムヘシト主張スル者アリ上雖モ是レハ此訴ノ沿  
 革ニ反スルノ批難ヲ免レス一ハ之カ爲メニ善意ノ第三者モ不當ノ損害又及ホ  
 スノ虞アルヲ以テ到底此説ハ採用スルヲ得サルモノトス

占有回收ノ訴ニ付テハ注意スルモノアリ即チ占有回收ノ訴ノ最モ必要ナ  
 ル條件タル被告カ原告ノ占有ヲ奪ヒタル事實ハ何人ニ於テ之ヲ證明スルヤ  
 ノ問題はナリ之ニ關シテハ學者ノ通説ハ原告ハ單ニ自己カ占有セシコト及ヒ  
 被告カ現ニ所持セルコトヲ證明スルニ足レルモノトシテ被告カ不法ニ占有ヲ  
 奪ヒタルノ事實ハ原告ニ於テハ其證明ヲ要セストモリ何レ故ニ此ノ如ク論結  
 スルヤト云フニ之ニ關シテハ消極的ノ事實ハ證明ヲ要セストモリ證據原則  
 ノ適用ナリトスル者多數ナルカ如シ然ルニ消極的ノ事實ハ證明ヲ要セストモ  
 ルノ證據原則ハ羅馬法以來ノ大原則ニシテ羅馬ニ於テハインノイセンス(第七  
 世カ之ヲ定メタル以來一般ノ學者カ是認スル所ナラシモ近來ニ至リクニ  
 ベースマン「ホーメルウニヒ」等ノ學者カ消極的ノ事實モ必スシモ證明ヲ要セテ  
 モノニ非スト云フヲ說ラ主張シ此原則ノ根底ニ付テ大ニ攻撃ヲ加フルヤ爾來  
 消極的ノ事實ハ證明ヲ要セストモリ原則ニ付テ學者ノ批難亦紛シトモ今  
 日ニ於テハ一疑問トシテ今當ニ證據法學者中ニ論争セラレツツアル所ナリ隨  
 テ本問題ニ付テモ彼ノ證據原則ノ適用ナリトスレハ其根底タル證據原則ノ不

明ナルカ故ニ大ニ疑ナキヲ得ルカ然レトモ單ニ此問題ヲ占有ノ效力ノ方面ヨリ觀察スルトキハ亦此論法ヲ是認セサルヘカテサルモノト如何トナシ  
 後節ニ述フル如ク占有權ノ一ノ效力トシテ占有者ハ當然權利者ト推定セラ  
 ルルモ其推定ハ一應ノ推定ニ止マルヲ以テ反對ノ證據アルトキハ其占有者ハ  
 自ら正當ノ權利者タルヲ證明スルニ非サレハ之ヲ正當ノ權利者ト謂フコト能  
 ハサルハ亦明カナリ是レ占有ノ效力ノ當然ノ結果ナリ果シテ然ラハ占有同收  
 ノ訴ニ於テ被告ハ現ニ占有セル者ナルカ故ニ一應權利者ト推定セラレモ原  
 告ニ於テ其反證ヲ舉ケテ原告ハ被告ヨリ前ニ占有ヲ爲セル事實ヲ證明シタル  
 トキハ被告ハ亦其占有ハ正當ニ之ヲ取得シタルモノナルコトヲ證明スルニ非  
 テレハ自己ノ占有カ不法ニ非スト主張スルヲ得サルハ亦明カナリ故ニ占有同  
 收ノ訴ニ於テハ原告ノ占有ヲ不法ニ奪ヒタル事實ノ有無ハ原告ニ於テハ證明  
 ヲ爲スノ責任ナシト斷定スルハ敢テ不可ナキナリ  
 占有同收ノ訴ニハ他ノ占有ノ訴ト同シク一定ノ期間定マレリ即チ其期間ハ占  
 有ヲ奪ハレタル時ヨリ一箇年トス(第二〇〇條)蓋シ是レ一面ニハ此期間内ニ占

有同收ノ訴ヲ提起セサルモノハ其權利ヲ拋棄シタルモノト看做スコトヲ得ヘ  
 ク一面ニハ此期間後ニ於テモ尙ホ其訴ヲ提起スルコトヲ得ルモノトスレハ占  
 有ノ關係ヲシテ永ク不確定ナラシムル虞アルカ爲メナリ  
 終ニ占有同收ノ訴ニ付テ説明ヲ要スヘキハ占有ノ訴ト本權ノ訴トノ關係是ナ  
 リ占有ノ訴トハ前述セル三種ノ訴ヲ謂フモノニシテ要スルニ占有權ヲ保護ス  
 ルカ爲メニ設ケラレタル訴ナリ而シテ其訴ノ原因ハ占有ニ基ケルモノナリ本  
 權ノ訴トハ之ニ反シテ占有ヲ保護スルニ非スシテ占有スヘキ權能即チ所有權  
 質權賃借權地上權永小作權ノ如キ占有スヘキ權能ヲ保護スヘキ訴ナリ而シテ  
 其訴ノ原因ハ占有スヘキ權能ニ基クモノナリ故ニ占有ノ訴ハ占有ノ事實ヲ保  
 護スル訴ニシテ本權ノ訴ハ占有ノ事實ヲ保護スル訴ニ非スシテ占有スヘキ權能  
 ヲ保護スル訴ナリ故ニ二者ハ其根本ニ於テ全ク異ナルモノニシテ其結果左ノ  
 原則ニ支配セラレ

第一 占有ノ訴ニ於テハ占有權ヲ原因トセルモノナルカ故ニ占有權ニ基キテ  
 之ヲ判斷スルコトヲ要ス本權即チ占有スヘキ權利ニ關スル理由ニ依リテ之

ヲ判斷スルコトヲ得ス又本權ノ訴ハ本權ヲ原因トスルモノナレハ占有權ニ基  
キ之ヲ判斷スルコトヲ得ス必ス本權ニ基キテ判斷スルコトヲ要ス(第二〇二條  
第二項參照)

第二節 占有ノ訴ト本權ノ訴ハ全ク別箇ノ訴ナリ一ハ占有權ニ基キ一ハ本權  
ニ基キモノニシテ二者ノ間ニハ亦何等ノ關係ヲ有セス全ク獨立セルモノナリ  
故ニ此訴ハ併合スルコトヲ得又一ノ訴ヲ提起シタルカ爲メニ他ノ訴ヲ提起ス  
ルコトヲ得スト云フコトナシ又他ノ訴ヲ提起サレタルカ爲メニ此訴ヲ中止ス  
ルコトヲ要セス即チ二者ハ全ク獨立セル訴ナリ(第二〇二條第一項參照)  
以上二箇ノ原則ハ占有ノ訴ト本權ノ訴ノ二ノ關係ヲ示スモノナリ

第二節 占有者ハ適法ニ權利ヲ有スルモノト推定

占有權ノ第一ノ效力タル占有訴權ノ要領ハ既ニ說述シタリ今ヤ進ミテ占有ノ  
第二ノ效力ヲ述ベシ占有ノ第二ノ效力ハ何ゾ曰ク法律ハ占有者ヲ以テ適法ニ  
權利ヲ有スルモノト推定スルコト是ナリ(第一八八條法律ハ何ヲ以テ此ノ如キ

推定ヲ下ヌヤト云フニ凡ソ占有ヲ爲ス者即チ事實上ノ支配ヲ爲ス者ハ概シテ  
權利ヲ有スルヲ以テ普通ノ狀態トス權利ナクシテ支配ノ事實ヲ有スル如キハ  
寧ロ其變例タリ故ニ占有者ヲ以テ先ツ適法ナル權利者ナリト推定スルハ當然  
ノ事ナリ是レ此效力ヲ認メタル所以ナリトス此效力ハ一見甚タ薄弱ナルノ觀  
アルモ實際ニ於テハ非常ノ利益ニシテ此效力アルカ爲メニ本權ノ訴ニ於テハ  
占有者ハ必ス被告ノ地位ニ立ツノ利益ヲ有ス即チ占有者ハ先ツ正當ノ權  
利者ト認メラルルカ故ニ之ヲ争フ者ハ先ツ原告トシテ訴ヲ起ササルヘカラサ  
ルノ責任ヲ生ス是レ實際ニ於テ非常ノ利益トスル所ナリ

第三節 占有者ハ權利ヲ取得ス

占有權ノ第三ノ效力トシテ占有權中左ニ掲タル所ノ條件ヲ具備スル者ハ當然  
ニ其目的物ノ上ニ行使スルノ權利ヲ取得ス  
第一 動産ノ占有ナルコト  
第二 其占有ハ善意無過失公然且平穩ノモノタルコト

以上ノ二條件ヲ具備スル占有者ハ當然其目的タル動産ノ上ニ行使スル權利ヲ取得ス(第一九二條參照)蓋シ動産ニ關スル權利ノ授受ハ甚タ容易ニシテ不動産ニ關スル權利ノ如ク登記ニ依ルノ手續ヲ要セス又日常頻繁ニ行ハレ且容易ニ各人ノ間ヲ輾轉スルモノナリ其結果動産ニ關スル權利ノ所在ハ今日此處ニ存在スルモ明日ハ既ニ彼處ニ移轉シ其所在極メテ不明ナリ隨テ動産ノ授受ニ付テハ其正當ノ權利者ハ何人ナルカ之ヲ鑑別スルコト頗ル困難ナリトス然ルニ動産ニ付テ所有權ノ一般ノ原則ニ從ヒ徹頭徹尾所有權ヲ保護シ其ノ權利者ニ非サル者ヨリ動産ヲ授受シタル場合ニハ讓渡人ノ不注意ナリトシテ何時ニテモ之ニ對シテ其取戻ヲ請求スルコトヲ得ルモノトスレハ動産ニ關スル權利ノ授受ハ極メテ危險ト爲リ其結果ハ動産ニ關スル取引ハ非常ニ不安全ト爲リ其極各人皆安シテ其取引ヲ爲スコト能ハサルニ至ラン是ニ於テカ所有權ノ保護モ亦固ヨリ必要ナリト雖モ第三者ヲシテ安シテ動産ニ關スル取引ヲ行ハシメ以テ一般取引ノ安全ヲ保持センカ爲メ或條件ヲ具備シタル占有者ハ事ロ之ヲ正當ノ權利者トシテ保護スルノ必要アリト是レ此效力ヲ認メタル所以ナリ

之ヲ要スルニ占有權ニ此效力ヲ付與シタルハ一ニ動産ニ關スル取引ノ安全ヲ圖ランカ爲メニ特ニ所有權ノ保護ヲ制限シ占有者ヲ保護シタルモノニ過キサルナリ然ラハ其占有ニハ如何ナル條件ヲ要スルヤ即チ左ノ四條件ヲ具備スヘキコト是ナリ

- (一) 善意ノ占有 善意ノ占有トハ正當ノ權限ヲ有スルモノト確信スルノ占有ヲ謂フ
- (二) 無過失ノ占有 無過失ノ占有トハ善意ノ占有ノ一ノ場合ニシテ正當ノ權限アリト確信スルコトカ相當ノ注意ヲ用ヒテ確信シタルモノニシテ過失ニ基クモノニ非サルヲ謂フ
- (三) 平穩ノ占有 平穩ノ占有トハ暴力若クハ強迫等ニ依リテ取得シタルモノニ非サル占有ヲ謂フ即チ其占有ヲ取得スルニ當リテ暴力若クハ強迫ヲ用ヒタルヲ謂フ
- (四) 公然ノ占有 公然ノ占有トハ隱祕ノ占有ニ非サルコトヲ謂フモノニシテ其占有ノ狀態カ特ニ之ヲ祕密ニ爲サレサルヲ謂フ

以上四條件ヲ具備シタルトキハ其動産ノ上ニ行使スヘキ權利ヲ取得ス即チ其占有者カ所有權ヲ行使スルノ意思ヲ以テ占有スレハ所有權ヲ取得シ置權ヲ行使スルノ意思ヲ以テ占有スレハ質權ヲ取得スルモノナリ蓋シ此等ノ條件ヲ有スルトキハ一概シテ其權利者タル場合多ク一ハ綜合其權利者タラズトスルモ此場合ニ所有權ノ原則ヲ適用セハ前述セル如ク一面ニハ動産ノ取引ノ不安全ヲ來ス虞アルヲ以テ之ヲ保護シテ動産ノ取引ヲ確實タラシメンカ爲メニ即チ此效力ヲ認メタルモノナリ

以上述ヘタル如キ條件ヲ具備セル占有ハ直チニ動産ノ上ニ其占有ニ相當スル權利ヲ取得スルモノナリ然ルニ此原則ニ對シテハ例外アリ蓋シ是レ所有權ヲ保護センカ爲メニ已ムヲ得ズ設ケタルノ例外則ニシテ元來所有者カ其占有ヲ他ニ移サシムル場合ヲ考フルニ二アリ

第一ハ所有者ノ意思ニ基キテ占有ヲ移ス場合ナリ例ヘハ物ヲ賣却シ若クハ貸與スル如シ此等ノ場合ニハ所有者ノ意思ニ基キテ占有ヲ移スモノナレバ隨テ其占有ノ效力トシテ竟ニ其物ニ關シテ或權利ヲ相手方ニ生スルコトトスルモ

所有者カ其效力ヲ恐レ其所有權ヲ保護セントセハ其占有ヲ移スコトヲ爲サザレハ可ナリ故ニ此場合ニ於テハ占有權ニ此ノ如キ重大ナル效力ヲ認ムルモ所有者ハ之カ爲メニ其權利ヲ保護スルヲ途ヲ失フコトナシ

第二ハ所有者ノ意思ニ反シテ占有ヲ移サシムル場合ナリ例ヘハ竊取セラレ或ハ紛失スル如シ此場合ニハ占有ヲ移スコトハ全ク所有者ノ意思ニ反スル場合ナリ故ニ所有者カ所有權ヲ保護シテ其占有ヲ移サシムルコトヲ希望スルモノ之ヲ速スルコト能ハス然ルニ一タヒ占有カ他ニ移サレタルコトヲ理由トシテ或條件ノ下ニ所有者ハ其權利ヲ失フトスレハ所有者ニ對シテハ法律ノ保護極メテ薄ク殆ト其保護ナキト同一ナリ故ニ此場合ニ於テハ所有權ヲ保護スルカ爲メニ占有權ノ效力ニ付テ少シク制限ヲ設ケサルヘカラス是レ實ニ占有權ノ第三ノ效力ニ例外ヲ設ケル所以ナリ然ラハ其例外ハ如何ナルモノナルヤト云フニ即チ占有カ所有者ノ意思ニ反シテ他ニ移サレタル場合ニハ二箇年ノ間ハ所有者カ其占有ヲ移轉ノ事實アリタル時ヨリ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得ルコト是ナリ第一九三條所有者ノ意思ニ反シテ占有ヲ奪ハル場合ハ

之ヲ分チテ二ト爲ス一ハ物ヲ遺失シタル場合ニシテ一ハ物カ盜難ニ罹リタル  
 場合はナリ  
 (一) 遺失シタル場合 遺失シタル場合トハ如何ナル場合ナルカ畢竟所有者ノ  
 意思ニ反シテ偶然ニ占有ヲ失ヒタル場合ナリ故ニ此場合ハ細別スレハ左ノ四  
 箇ノ條件ヲ必要トス  
 (イ) 所有者ノ意思ニ反シテ占有ヲ失ヒタルコト  
 (ロ) 偶然ニ占有ヲ失ヒタルコト 偶然ニ占有ヲ失ヒタルトハ他人ノ故意アル  
 行爲ニ因リテ占有ヲ失ヒタルモノニ非サルヲ謂フ  
 (ハ) 物ノ所在不明ナルコト  
 (ニ) 所有權ヲ拋棄セサルコト  
 以上ノ四條件ヲ具備シタルトキハ即チ遺失シタル場合ト認メラル此場合ニ於  
 テハ遺失ノ時ヨリ二箇年間ハ尙ホ占有者ニ對シテ物ノ回復ヲ請求スルコトヲ  
 得  
 (二) 盜難ニ罹リタル場合 此場合ハ竊取セラレタル場合ト強奪セラレタル場

合トシテニアリ要スルニ他人ノ故意アル行爲ニ因リテ占有ヲ其所有者ノ意思ニ  
 反シテ奪ハレタル場合ナリ其占有ヲ奪フニ當リテ暴行強迫ヲ用フレト否トニ  
 由リ或ハ竊取ト爲リ或ハ強奪ト爲ル此場合ニ於テ其盜難ニ罹リタル時ヨリ  
 二箇年間ハ所有者ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得  
 以上ハ所有權ヲ保護スルカ爲メニ設ケタル占有者ヲ保護スルカ爲メニ已ムヲ得  
 此制限ニ對シテ一ノ例外アリ此例外ハ占有者ヲ保護スルカ爲メニ已ムヲ得  
 ルノ必要ヨリ設ケタルモノニシテ即チ民法第百九十四條及ヒ第百九十五條ニ  
 定メタル場合はナリ  
 第一ハ公ノ市場若クハ競賣ノ方法ニ依リ又ハ其目的物ト同種ノ物ヲ販賣スル  
 商人ヨリ善意ニテ物ヲ買受ケタル場合ニハ其物カ遺失物ナルト盜品ナルトヲ  
 問ハス所有者ハ占有者ニ對シテ其代價ヲ辨償スルニ非ラズハ其物ノ回復ヲ請  
 求スルコトヲ得サルコト是ナリ即チ此場合ニハ所有者ハ回復ヲ請求スルモト  
 ヲ得ルモ必ス其代價ヲ辨償スルノ必要アリ何トナレハ此場合ニハ第三者カ物  
 ヲ販賣スルニ正當ナル場所正當ナル方法ニ依リテ取得シタルモノナルヲ以テ



此例外ヲ認めザルトキニ於テハ動産ヲ取引ハ極メテ不完全ト爲リ遂ニ取引ノ安全ヲ害スルニ至ルヲ以テナリ(第一九四條)トモハ(第二九六條)ニ依リテ第二ニ其占有ノ目的物カ動物ニシテ而モ其動物ハ家畜ニ屬セザルモノナル場合ニ所有者ハ其占有ヲ失ヒタルトキハ一箇月間其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得ルモ此期間ヲ經過シタル後ハ善意ノ占有者ハ直チニ物ノ上ニ所有權ヲ取得スルコト是ナリ何故ニ此ノ如ク家畜外ノ動物ニ付テハ一種例外ノ規定ヲ設ケタルカト云フニハ普通ノ家畜ニ屬セサル動物ハ之ヲ無主物ト認ムルハ當然ノ推定ナリ故ニ家畜外ノ動物ヲ善意ニテ占有シタル者ハ當然其所有者トスヘキ理由アリ又一ハ家畜外ノ動物ハ家畜ニ屬スル動物ト異ニシテ動モスレハ逸走シ易キヲ以テ其占有ヲ失フヤ直チニ所有權ヲ失フトスレハ所有權ヲ保護甚タ薄キニ失ス故ニ一箇月間ハ所有者ニ於テ之ヲ回復スルコトヲ得トスルノ必要アリトス是レ此例外ヲ認めタル所以ナリ(第一九五條)

第三ノ效力ニ來達シテ注意スヘキ事項アリ即チ占有物ヲ本人カ占有者ヨリ回復シタル場合ニ其占有物ニ付テ占有者カ費用シタル費用ハ回復者

之ヲ償フヘキ義務アルヤ否ヤノ問題はナリ之ニ付テハ其費用ノ性質ニ付テ其責任ヲ異ニス抑モ占有者カ占有物ニ付テ要シタル費用ハ種類アルモ大別スルニ之ヲ三種ニ分ツコトヲ得第一必要費第二有益費第三奢侈費是ナリ(第六第一) 必要費 必要費トハ其物ヲ保存ニ必要ナル費用ヲ謂フ故ニ此費用ハ最も必要ナル費用ニシテ占有物ヲ回復シタル場合ニハ本人ハ當然辨償スルノ義務アリトス但キ必要費用ハ之ヲ二分類スルコトヲ得一ハ通常費ニシテ一ハ臨時費是ナリ此通常費用トハ物ノ使用上當然生スル所ノ費用ヲ謂フ故ニ此費用ハ其物ヲ使用スル者カ之ヲ負擔スルコトヲ以テ當然トス隨テ占有者カ其物ヲ使用シテ果實ヲ取得シタル場合ニ於テハ通常費ハ占有者ノ負擔ニ屬スルモノトス(第一九六條第一項)

第二有益費 有益費トハ物ヲ保存ニハ必要ナラサルモ此費用ニ依リテ其物ノ價額ヲ増加シタルモノヲ謂フ例ヘハ改良費ノ如キ是ナリ此費用ハ必スレモ本人カ負擔スヘキモノナラサルモ本人カ此費用ヲ負擔セシメテ其物ノ回復ヲ得タルトキハ其價額ノ増加シタル分ハ不當ノ利得ヲ爲スモノナルヲ以テ不當

利得ノ原則ニ基キ有益費ニ依リテ増加セタル價額ハ本人ニ於テ之ヲ負擔ス  
 ナ當然トス然ルニ或場合ニ於テハ消費費シテ所有有益費用ヨリ其生シタル價額ノ  
 増加ヲ大ナルコトスリ此場合ニハ本人ハ其費用ヲ辨償スレハ足レカ故ニ有益  
 費ニ付テハ其費用ヲ辨償スルカ又ハ其増價額ヲ辨償セシムルカハ自由ニ本人  
 ノ選擇ニ任セタリ第一九六條第二項而シテ右ニ述ヘタル増價額ハ現ニ存スル  
 増價額ヲ謂フ何トカハ其價額ニシテ現存セザルトキハ本人ハ何等ノ利得ヲ  
 得爲ナサルヲ以テ其費用ヲ辨償スルノ義務ナクレハナリ但有益費ハ本人カ之  
 ヲ辨償スルハ當然ナリトスルモ場合ニ依リ其額ノ多キコトアリ此場合ニハ本  
 人ニ於テ迷惑ヲ感スルコト少シトセス隨テ惡意ノ占有者ハ本人ヲシテ物ノ同  
 復ヲ困難ナラシムルカ爲メニ故ラニ多額ノ有益費ヲ支出シ其取戻ヲ困難ナラ  
 シムルコトナシトセス此場合惡意ノ占有者ニ對シテハ裁判所ハ本人ニ  
 請求ニ因リ有益費ノ辨償ニ付テハ相當ノ期限ヲ與フコトヲ許セリ第一九六  
 條第三項ニ於テハ「民法第一九六條第三項ニ於テハ「相當ノ期限ヲ與フコトヲ許セリ」  
 第三 奢侈費 奢侈費トハ全ク占有者カ自己ノ嗜好ノ爲メニ費シタル無益ノ

費用ナルヲ以テ本人ハ之ヲ辨償スルノ責ナキモノトス

以上述ヘタル三種ノ費用ヲ區別シ從ヒ本人ハ占有者カ其物ニ關シテ費シタル  
 費用ヲ辨償スヘキモノトス

**第四節 占有者ハ果實ノ所有權ヲ取得ス**

占有權ハ左ノ條件ヲ具備スルトキハ其占有セタル目的ヨリ生シタル果實ニ付

テ所有權ヲ取得ス是レ占有權ノ第四ノ效力ナリ(第一八九條第一九〇條)

第一 善意ノ占有タルコト

第二 平穩ノ占有タルコト

第三 公然ノ占有タルコト

右ノ條件ヲ具備シテ占有ヲ爲シタルトキハ其目的物ヨリ生シタル果實ニ對シ  
 テハ所有權ヲ取得ス何ヲ以テ此ノ如キ效力ヲ認ムルヤト云フニ此等ノ條件又  
 具備セル占有者ハ概シテ無過失ノ占有者ニシテ或ハ多少ノ過失アリトスルモ  
 深ク咎ムルニ足ラサル所ノ占有者ナリ然ルニ其占有者カ其果實ヲ消費シタル

民法物權 占有權ノ效力 占有者ハ果實ノ所有權ヲ取得ス

トキニ於テモ尙ホ其果實ヲ返還スヘシトモ却テ占有ノ結果占有者ニ對シテ  
 損失ヲ生セシムルニ至ラン故ニ其占有者ヲ保護シテ其果實ニ付テハ當然所有  
 權ヲ取得スルモノトシタルナリ此等ノ條件ヲ具備セザル占有者ハ亦何等ノ效  
 力ヲ生セザルカ故ニ其者ノ占有シタル目的物ヨリ生シタル果實ハ一切之ヲ  
 本人ニ返還セザルヘカラサルノ義務アリトス即チ既ニ生シタル果實及ヒ生ス  
 ルコトヲ得ヘカラシ果實換言スレハ一切ノ果實ヲ價フヘキモノナリ(第一九〇  
 條)

以上ハ占有權ノ第四ノ效力ナリ茲ニ一ノ注意スヘキコトアリ即チ善意ノ占有  
 者ト雖モ本人ヨリ訴ヲ提起セラレテ被告ト爲リタルトキハ其訴ヲ起サレタル  
 トキヨリ其占有ハ善意ノ占有ト爲ルコト是ナリ何トナレハ其以前ニ於テハ自  
 己ヲ權利者ナリト確信セシモ相手方ヨリ權利ヲ主張セラレタル場合ハ最早善  
 意ト認ムルコトヲ得サレハナリ此原則ノ結果トシテ善意ノ占有者モ本人ヨリ  
 訴ヲ起サレタル瞬間ヨリ後ハ其果實ノ所有權ヲ取得セザルモノトス(第一八九  
 條)

終ニ注意スヘキ問題ハ占有者ノ責任ニ歸スヘキ事由ニ因リ占有物ヲ消滅セシ  
 ヲ若クハ毀損セシメタルトキハ占有者ノ如何ナル責任ヲ負フカノ疑問是ナリ  
 之ニ關シテ善意公然平穩ノ三條件ヲ具備シ且所有ノ意思ヲ以テスル占有者ナ  
 ルトキハ何等ノ責ヲ負ハサルヲ原則トス何トナレハ此場合ニハ占有者ニ於テ  
 自己ノ權利ト確信スルモノニシテ而モ其占有者ニハ過失ナキコトヲ通常トス  
 ルカ故ニ之ニ賠償ノ義務ヲ負ハシムルハ甚タ酷ナレハナリ然レトモ亦占有者  
 ナシテ不常ノ利得ヲ爲サシムルノ必要ナキニ因リ若シ此場合ニ於テ現ニ存在  
 スル物アルトキハ其物ハ本人ニ返還セザルヘカラストセリ(第一九一條其他ノ  
 場合ニハ)惡意ノ占有者ハ當然其行爲ニ付テ責ヲ負フヘキモノニシテ即チ損  
 害ノ全部ヲ賠償スヘキモノナリ(二)善意ノ占有者ナルモ所有ノ意思ヲ以テスル  
 ノ占有ニ非サル者ハ他人ノ所有ニ屬スルコトヲ認ムルカ故ニ其占有物ノ滅失  
 若クハ損失ニ付テハ亦之ヲ賠償スルノ義務アリトス

### 第六章 準占有

### 第一節 準占有ノ意義

準占有トハ占有權ノ研究ト同時ニ牽聯シテ究スヘキモノナリ元來準占有ノ意義及ヒ性質ニ付テハ學說區區ニシテ占有權ト同シク法學者間ノ一問題ナリ今準占有ニ關スル各國ノ制例ヲ見ルニ羅馬法ニ於テハ占有權ノミヲ認メ準占有ナルモノハ殆ト之ヲ認メナリシカ如シ帝政時代ニ至リ始メテ二種ノ準占有ヲ認メタルモ是レ極メテ狭小ナル範圍ニ屬スルモノニシテ僅ニ役權ニ付テノミ之ヲ認メタルニ過キス故ニ羅馬法ニ於ケル準占有ハ役權ノ占有ナリト稱アリ蓋シ羅馬法ニ於テモ共和政ノ時代ニハ役權ノ占有モ亦一種ノ占有ト看做セリト雖モ元來役權ノ占有ハ其物ニ就テ一部ノ支配ヲ有スルノミニ過キス所謂所持ノ事實ハ未タ之ヲ有セザルモノナリ隨テ帝政時代ニ至リテハ之ヲ純然タル占有ト稱スルコトヲ得スシテ遂ニ一種ノ占有ニ準スルモノナリトセルモノナリ之ヲ要スルニ羅馬法ニ於テハ占有若クハ準占有ヲ認ムルニ當リ亦有體物ヲ目的トスルモノニ限ルトシ隨テ役權ノ占有如キモ亦一ノ有體物上ニ存

スル所ノ權利關係トシテ之ヲ認メタルモノニシテ當時ニ純然タル權利ヲ占有スルノ觀念ハ全ク之ヲ存セザリキ中古ニ至リテハカノン法ハ準占有ヲ認ムルノ範圍極メテ廣ク一切ノ權利ニ及フモノトシテ私法上ノ權利公法上ノ權利宗教法上ノ權利ニ至ルマテモ之ヲ認メタリ例ヘハ親族法上ノ權利即チ夫權親權家長權ノ如キ或ハ宗教上ノ符位ニ關スル權利ノ如キ或ハ公法上租稅ヲ徵收スル權利ノ如キニ至ルマテ準占有ヲ認メタリ唯準占有ノ目的ト爲ル權利ハ必ス一回ノ使用ニ依リテハ消滅セザル狀態ノ權利ニ限ルトセリ獨逸法ハ其準占有ヲ認ムルノ範圍概テカノン法ニ依レリト雖モ一面ニハ此ノ如キ廣キ範圍ニ於テ準占有ヲ認ムルノ必要ナキカ爲メ一面ニハ羅馬法繼受ノ結果彼ニ倣ヒ其範圍ヲ狹メントスルカ爲メ漸ク其範圍ヲ制限シ(一)親族上ノ權利ニハ一切準占有ヲ認メス(二)公法上ノ權利ニハ亦準占有ヲ認メザルヲ原則トセリ隨テ(三)財產權ニ付テノミ準占有ヲ認メタリ(四)一回ノ使用ニ依リテ消滅スヘキ狀態ノ權利ニ付テハカノン法ト同シク準占有ヲ認メストモリ以上ハ準占有ニ關スル沿革ノ要領ナリ此ノ如ク各國ノ法律ハ準占有ヲ認ムル理由ハ何レニ在ルヤ蓋シ占有

ヲ保護スルハ社會ノ秩序ヲ維持スルカ爲メ現在事實ヲ保護スルヲ止ムコトヲ得サルニ出ヅルモノナリ然ルニ事實上ノ支配ハ之ヲ分析スレハ二アリ一ハ即チ物ノ上ノ支配ニシテ一ハ即チ權利ノ支配ナリ例ヘハ家屋ヲ支配スルハ第一ノ場合ニシテ債權者ニ非サル者カ債權者ノ地位ニ立チテ債權者ヨリ利息ヲ收メテツアル状態ハ第二ノ場合ナリ此二者ハ共ニ一ノ事實上ノ支配タリ而シテ法律ハ社會ノ秩序ヲ維持スルカ爲メ現在事實ヲ保護スルノ必要アリトシテ第一ノ場合ニ保護シテ即チ占有權ヲ認ムル以上ハ又第二ノ場合モ一箇ノ現在事實タレハ法律ハ當然之ヲ保護スヘキモノナリ是レ法律カ其保護ヲ廣メテ物ノ支配ノ外ニ向ホ權利ノ支配ヲモ保護スル所以ナリ之ヲ要スルニ占有權ヲ認ムルノ理由ハ遂ニ準占有ヲ認メサルヲ得サルニ至レルモノナリ即チ法律ハ物ノ支配ヲ保護シテ占有ト謂ヒ權利ノ支配ヲ保護シテ準占有ト謂フモノニシテ準占有ト占有トノ差異ヲ舉タレハ即チ左ノ如シ

第一 準占有ト占有トハ其本體ヲ異ニス即チ占有ハ物ノ上ノ支配關係ニシテ準占有ハ之ニ反シテ權利ノ上ノ支配關係ナリ換言セバ準占有ト占有トハ其支

配關係タルニ於テハ同一ナルモ其目的全ク異ナレリ

第二 占有權ハ其權利ノ性質物權ニ屬ス何トナレハ直接ニ物ノ上ニ行ハルル支配關係ナレハナリ準占有ハ之ニ反シテ財產權ニ屬スルモ其性質物權ニ非ス何トナレハ權利ノ上ニ行ハルル支配關係ニシテ物ノ上ニ行ハルルモノニ非ズレハナリ準占有ノ規定カ我民法物權中ニ在ルノ故ヲ以テ物權ナリトスルハ非常ノ誤謬ナリ

是ニ由リテ之ヲ觀レハ準占有ハ權利ノ支配ノ謂ニシテ其本體ハ即チ權利ノ支配ノ事實ナリ法律カ此事實ヲ保護シタル爲メニ此事實ハ一種ノ權利ト爲レリト雖モ此權利ハ財產權ノ一ニシテ物權ニ屬セザルナリ

準占有ニ關シテハ從來種種ノ說アリ是レ占有權ニ關スル觀念ニ誤謬アルカ爲メナリ即チ一說ハ準占有ハ占有ノ一種ナリトセリ是レ占有權ハ物及ヒ權利ヲ目的物トスルモノニシテ即チ占有權ノ目的物ハ物及ヒ權利ノ二種アリトスルカ爲メナリ此觀念ハ全ク一箇ノ理想ニ過キ共固ヨリ我民法ヲ採用スル所ニ非タルナリ何トナレハ(一)占有權ノ目的物ハ物及ヒ權利ノ二アリトセハ所謂準占

有ハ當然占有權ノ中ニ入ルモノニシテ占有權ノ外別ニ準占有ヲ認ムルノ必要ナケレハナリ(二)又占有權ノ沿革ヨリ觀ルモ此觀念ハ疊々事實ニ反ス羅馬法ノ如キハ適例ナリ又一説ニハ占有權ハ總テ準占有ナリトス是レ占有權ノ目的物ハ總テ權利ナリトスレハナリ此説ニ依レハ占有權ノ目的物ハ常に權利ニシテ所謂物ヲ目的トスル占有ハ即テ所有權若クハ其他ノ物權ヲ目的トスルニ過キストスルニ在リ此觀念ハ亦一箇ノ理想ニ止マルモノナリ何トナレハ(一)此説ハ占有權ノ觀念ニ反ス占有權ノ觀念ハ前ニ説明セル如ク有體物ノ支配ニ關スル觀念タルハ其沿革ニ徴シテ明白ノ事實ナリ(二)占有權ノ目的物ヲ權利ナリトセハ占有權モ亦一ノ權利ナルヲ以テ占有權ノ占有ヲモ認メサルヘカラサルノ結果ヲ生シ却テ占有權ノ性質ヲ混亂セシムルノ虞アレハナリ是ニ由リテ之ヲ觀レハ準占有ヲ以テ占有權ノ一種ナリトシ又ハ占有權ハ總テ準占有ナリトスルノ見解ハ皆占有權ノ觀念ニ反スルモノナリト謂ハサルヘカラズ

### 第二節 準占有ノ範圍

第四例外及ヒ第五例外ハ局外中立ノ部ニ説明スヘキモノナレハ茲ニ之ヲ略ス  
 次ニ他國ノ領海内ニ在ル國家ノ非代表船舶ニ付テ説明スヘシ今甲國ノ非代表船カ乙國ノ領海内ニ單ニ沿岸海ヲ通過スルノミナルトキハ然ラス在ル場合ニ於テハ甲國ノ非代表船ハ乙國ノ主權ノ下ニ服從ス何トナレハ乙國ハ自國ノ領海内ニ主權ヲ行フコトヲ得ルカ故ニ何國ノ船舶ニ對シテモ同一ニ主權ヲ及ホスコトヲ得ヘシ然レトモ甲國船カ乙國ノ主權ノ下ニ服從スルノ理由ヲ以テ空ク自國ノ主權ニ對スル服從ヲ離ルルモノト云フコトヲ得是レ猶ホ人カ外國ニ在ル場合ニ於ケルカ如シ例ヘハ日本人カ外國ニ於テ犯罪ヲ犯スモ日本ハ之ヲ處罰スルノ權利ヲ有シ又日本外國ニ在ルトキト雖モ日本ノ國家ハ之ニ對シテ兵役ニ服セシメ又租稅ヲ徵收スルノ權利ヲ有ス船舶モ亦之ニ同シテ外國主權ノ下ニ服從スルトノ故ヲ以テ日本ノ主權ニ服從セサルモノニ非ス若シ主權ノ衝突シタルトキハ其滞在國ノ主權ヲ審セサル限ハ本國ノ主權ニ服從セシム換言スレハ外國ノ秩序ニ關スルコトニ付テノミ外國ノ主權ニ服從スルモノナリ  
 次ニ國家ノ代表船舶ヘハ軍艦カ公海ニ在ル場合ト他國ノ領海内ニ在ル場合ト

ヲ分説スヘシ。軍艦ハ公海ニ在ル非代表艦スル他國ノ主權ニ  
 公海ニ在ル軍艦ハ殆ト説明ヲ要セス公海内ニ在ル非代表艦スル他國ノ主權ニ  
 下ニ立タサルモノナリ況ヤ國家ノ代表艦ニ於テヤ本國ノ主權ニ依リテ  
 軍艦カ他國領海内ニ在ルトキハ其領海所屬國ノ主權ヲ及ホスコトヲ得ス國家  
 ハ外國ノ軍艦ノ入港ヲ拒絕スルノ權利アリ軍艦ハ非平和的ノモノナレハ自國  
 ノ安全ヲ保タンカ爲メニ其權利ヲ有スルナリ然ルニ若シ之ヲ公認又ハ默認シ  
 タルトキハ領海國ハ其主權ヲ自國領海内ニ在ル他國ノ軍艦非代表艦ニ及ホス  
 コトヲ得ス從來ノ學者ハ軍艦ハ其所屬國ノ延長ナリトノ擬制ヲ認メタリ然レ  
 トモ土地ハ延長シ得ヘキ性質ノモノニ非ス故ニ予ハ本國ヲ代表スルノ理由ヲ  
 以テ此特權ヲ有スルモノナリト解釋セント欲ス蓋シ一國ノ主權ハ之ヲ他國主  
 權ノ上ニ及ホスコトヲ得ス國ノ主權ハ其國ノ領海ニ在ル他國ノ主權ニ及  
 登ニ又一ノ問題アリ軍艦カ他國ノ領海ニ在ル場合ニ之ニ主權ヲ及ホサスト云  
 フハ其軍艦内ニノミ主權ヲ及ホササルニ意ナルヤ又ハ其艦員カ艦外ニ在ル場  
 合ニモ尙ホ主權ヲ及ホスコトヲ得テヤ此事ニ關シテハ大體三種ノ學說アリ

第一說 當然主權ヲ及ホスヘシトノ說ニシテ其理由ニ曰ク艦員ハ艦内ニ在ル  
 モ軍艦ノ一部ヲ組成シ艦外ニ在ルモ軍艦ノ一部ヲ組成スル者ナリ若シ艦外ニ  
 在ルトキハ滞在國ノ主權ニ服従ストスレハ軍艦タルノ效力ヲ失スルニ至ルヘ  
 ケレハナリト  
 第二說 第一說ト正反對ノ說ニシテ艦員ハ艦内ニ在ルトキニハ職務ヲ行フ者  
 ナレトモ艦外ニ在ルトキハ職務ヲ行フ者ニ非ス此場合ニハ一人ナリ國家ヲ  
 代表セサル一人ノ爲シタル行爲ニ付テ其滞在地ノ國家カ主權ヲ及ホスコト  
 ヲ得ルハ言テ竣タスト云フナリ  
 第三說 艦外ニ在ル場合ト雖モ職務ヲ有スル場合ト然ラサル場合トアリ軍艦  
 ノ職務ニ因リテ外出シタルトキハ其滞在國ノ主權ニ服従セス私用ヲ以テ軍艦  
 外ニ在ルトキハ其滞在國ノ主權ノ下ニ服従スト  
 第三說ハ最新ナル學說ナリ然レトモ予ハ之ニ贊向スルコトヲ得ス蓋シ職  
 務ノ公私ヲ區別スルコトノ困難ナルノミナラス苟モ艦員タル資格ヲ有スル者  
 ハ艦外ニ於テモ亦軍艦ヲ組成セル一分子ナレハ滞在國ノ主權ニ服従スヘキニ

ノニ非ス茲ニ我國ニ於ケル實例アリ英國軍艦カ我國ニ來リタルトキ其艦員ニ支那人二名アリテ此二名カ上陸シ賭博罪ヲ犯シタルヲ以テ我國ハ之ヲ處罰シタリ然ルニ英國ハ自國ノ軍艦員ヲ何故ニ處罰シタリヤトノ抗議ヲ爲シタルニ我國ハ此抗議ニ對シ清國人ナルノ故ヲ以テ處罰セリト答辯シタリ

次ニ説明スヘキハ河湖水端割ニシテ河ニハ領河二國以上ノ境界ヲ流ルル河及ビ數國ヲ貫流スル河ノ三種アリ而シテ三者共ニ國際ノ河即チ萬國ノ航行ヲ自由ニスルノ河ト爲スコトヲ得自國ノ領河ニ萬國ノ航通ヲ許スコトハ該河流ニ對シテ一切ノ權利ヲ拋棄シタルモノニ非ス警察權、使用權、費用徵收權等一切ノ權利ハ當然之ヲ有スルモノナリ故ニ領河ヲ萬國ノ航行ニ委スルコトニ付キ最も重要ナルコトハ第一ニ之カ爲メニ沿岸國ノ主權ヲ害セサルコト第二ニ各國ノ船舶ニ航行ヲ許ササルヘカラサルコト是ナリ現今國際河流ト爲レル主ナルモノヲ舉テレハ次ノ如シ

第一「ライン河」此河ハ巴里媾和條約第五條、維納媾和條約第十七條ニ依リ萬國船舶ノ航行ヲ許シタリ千八百三十一年三月三十一日「ライン河」航行條約ヲ結ビ

タルモ此條約ハ航行ノ自由ヲ沿岸國ニ與ヘタルノミナリ千八百六十八年ノ改正條約ニ依リ「バルゼル」(瑞)西ト稱逸トノ境界ニ在ル都府ノ名ナリ)ヨリ海ニ至ルマテハ萬國ノ船舶ノ航行ヲ許スコトト爲シ千八百七十九年「バルゼル」西間ノ條約ニ依リ萬國船舶ノ航行ヲ得ヘキ部分ヲ「ノイハウゼン」マテ擴張シタリ

第二「ダニユー」河 此河ノ航行自由ノコトハ千八百五十六年ノ巴里條約第十五條以下ニ依リテ定マレリ而シテ「イムラ」ヨリ黑海ニ至ルマテハ各國ノ船舶ニ航行ヲ許スコトト爲セリ而シテ此「ダニユー」河ノ航行自由ノ事ヲ定ムカ爲メニ「ダニユー」河委員會ナルモノヲ設ケタリ然ルニ沿岸國ノ委員會ハ沿岸ノ航行ハ沿岸國ノミニ許スコトトシ他ノ諸國ハ公海ヨリ或港ニ至ルマテ又ハ或港ヨリ公海ニ至ルマテ航行スルコトヲ得ルコトトセリ故ニ諸國ハ之ヲ排斥シ千八百六十五年諸國ハ「歐羅巴」(ダニユー)河委員會ヲ設ケテ「ダニユー」河航行條約ナルモノヲ定メ歐羅巴委員會ノ建物委員水上病院王事ニ從事スル技術者等ハ皆局外中立ノモノト爲セリ向ホ千八百七十一年ノ條約ハ更ニ多クノ權利ヲ歐羅巴委員會ニ與ヘタリ千八百七十八年柏林條約第五十二條ハ「ダニユー」



イブノ局外中立ナル部分ヲ更ニ擴張シ之ヲ鐵門ニ及ホシ鐵門ヨリ河口ニ至ルマテノ沿岸ニ在ル砲臺ヲ破毀シ更ニ之ヲ再設スルコトナカラシメ軍艦ハ鐵門ヨリ上流ニ溯ルコトヲ得スト爲セリ千八百八十三年三月十日ノ倫敦條約ハ國際委員會ノ權利ヲ向フ二十一年間延期シタリ

第三「コンゴ」河「コンゴ」河ヲ國際河流ト爲シタルハ千八百八十五年ノ柏林條約ニ依ル其主ナル事項ハ次ノ三箇ナリ(一)交通ヲ自由ニスルコトハ單ニ「コンゴ」河ノミニ限ラス此河ノ近傍ニモ亦其自由ヲ及ホシ「コンゴ」河ノ支流其接續スル湖水、運河、鐵道、道路ハ皆萬國ノ交通ニ委スルコトト爲セリ(二)唯リ商船ニ限ラス軍艦モ亦航行スルコトヲ得(三)戰時ニモ尙ホ此自由アリ但戰時禁制品ヲ運搬スルコトハ之ヲ禁シタリ

千八百五十六年「ザンベジ」河「ザンベジ」河湖水カ一國ノ版圖内ニ屬スルトキハ其國ノ主權ハ全ク之ニ普及スルコトハ論ヲ埃タス唯疑ノ存スルハ數國ニ圍繞セララル場合ナリ數國ニ跨ル湖水ニ付テハ原則トシテ其湖水ニ瀕スル諸國ハ皆均シク主權ヲ及ホスモノナリ其反面ヨリ觀テ其湖水ニ對シテ主權ヲ有スルハ其湖水ニ瀕シタル諸國ニ限ル而シテ此

場合ニハ其湖水ニ瀕スル諸國ハ單獨ニ權利ヲ有スルコトナク各國同一ノ權利ヲ有ス然レドモ條約ニ依リテ數國ノ有スル權利ヲ一國ニ委スルコトアリ其實例ハ千八百二十八年「ツルク」メ「ンチヤ」ノ條約ニ依リ「波斯露西亞間」ニ在ル裏海ニ軍艦ヲ浮フル權利ヲ唯リ露國ノミ專有シタルカ如シ

現今數國ニ圍繞セララル湖水ハ最モ少シ其著シキモノハ裏海、瑞佛間ニ在ル「ラ」ト「クレマン」即チ「デ」チ「グ」湖及ヒ塊、獨瑞間ニ跨レル「コン」スタ「ン」湖是ナリ

「コン」スタ「ン」湖ハ實際五箇國ニ跨ル何トナレハ塊、太利及ヒ瑞西ノ外獨逸國中「ウ」ム「ラ」シ「セル」ヒ「バ」バ「リヤ」「バ」イ「エル」ニ跨レハナリ而シテ此五箇國ハ「コン」スタ「ン」湖ニ對シ同一ノ權利ヲ有ス其結果トシテ湖ニ付テ同一ノ行爲ヲ爲スル權利ヲ有シ他國ノ爲メニ何等ノ掣肘ヲ受クルコトナキト共ニ他國ノ權利ヲ害スルコトヲ得ス例ヘハ湖水ヲ乾カスカ如キハ圍繞セル他國ヲ害スルヲ以テ之ヲ爲スコト能ハス而シテ實際ニ於テ此湖水ニ付テ諸國カ如何ナル權利ヲ有スルヤハ條約ニ依リテ定マル其條約ノ大要ハ無主物ニ非サルコト及ヒ沿岸國ハ同一ナル權利ヲ有スルコトニ在リ然レトモ歴史上ヨリ觀レハ此湖ニ付テ成

一國ヲ全ク獨占の權利ヲ行ヒタルコトアリ又全ク關係ナキ他國カ權利ヲ行ヒタル實例アリ故ニ今日ニ於テハ條約ヲ以テ圍繞國以外ノ國家カ此湖ニ對シテ權利ヲ有セザルコトヲ定メタリ然ルニ或ハ此湖水ヲ圍繞セル國ノモナラス世界各國カ「コンスタンス湖」ニ航行ヲ爲スノ權利ヲ有スト主張スル者アリ其理由トスル所ハ此湖水ハ「ライン」河ノ擴張シタル部分ナリ而シテ「ライン」河ハ今日萬國ノ航行ヲ許ス所ノ國際河流ナルカ故ニ其一部分タル「コンスタンス湖」亦當然萬國ノ航行スヘキモノナリト云フニ在リ然レドモ此見解ニハ二箇ノ缺點アリ第一此湖水ハ「ライン」河ノ水ノミニ由リテ成立ツモノニ非ス故ニ「ライン」河ノ一部分ト爲スハ誤ナリ第二「ライン」河ノ國際河流タルコトハ疑ナキニ「ライン」河ノ萬國航行ノ部分ハ此湖水ニマテ及フモノニ非スシテ遙ニ此湖水ノ下流タル「ノイハウゼン」ニ至ルマテニ及フモノナリ故ニ此二箇ノ點ヨリ觀テ之ヲ國際河流ナリト稱スルコトヲ得ス

向ホ進ミテ此湖水ノ上ニ生シタル法律上ノ問題ハ如何ニ之ヲ決スルカ就中最モ疑ヲ生スルハ此湖上ニ於テ他國ノ船舶ト衝突シタルトキハ何レノ法律ニ依

報 雜

○取消權行使ノ方法 現行民法ノ施行前ニ締結シタル契約ニ取消ノ事由アル場合ニ於テ之ヲ取消サントスルニハ舊法ニ定メタル方法ニ依リテ之ヲ爲スヘキカ將タ新法ニ依ルヘキカ即チ此場合ハ民法施行法第一條ニ謂フ所ノ「民法施行前ニ生シタル事項ニ付テハ本法ニ別段ノ定アル場合ヲ除ク外民法ノ規定ヲ適用セス」ナル規定ニ包含セラルルモノナリヤ否ヤニ付テハ第一ニ舊法ノ下ニ於テ締結シタル契約ノ瑕疵ハ舊法ニ從フニ非サレハ之ヲ平癒セシムルコト能ハサルト同シク其瑕疵ニ因リテ之カ取消ヲ爲サントスル者モ亦舊法ニ從ヒテ其意思ヲ表示スルニ非スンハ相手方ニ對シテ其效力ナシ何トナレハ其契約ヲ相手方ハ契約當時ニ於テ既ニ其當時ノ法律ニ依ルニ非サレハ取消サレサルノ權利ヲ有スレハナリトテ說ヲ立ツル者アルベク次ニ之ニ反對スル者ハ法律ニ常ニ取消權ヲ有スル者ヲ厚ク保護スルモノナルト取消權行使ノ方法ハ單ニ

方式ニ關スルモノナリトノ理由ニ據リテ新法ニ從フヘキモノナリト主張ス  
 シ此問題ニ關シ東京控訴院ハ前顯ノ民法施行法第一條ニ據リテ新法ニ依ル取  
 消權ノ行使ヲ非認セラレタリ然ルニ大審院ハ下ノ理由ヲ以テ此說ヲ排斥セラ  
 レタリ曰ク「按スルニ契約ヲ取消スニハ裁判上ノ手續ヲ必要トスルヤ又ハ取消  
 權ヲ有スルモノヨリ相手方ニ對シ其意思ヲ表示スルノミニテ可ナルヤハ取消  
 權ヲ實行スル方法ノ問題ニシテ契約ノ效力ニハ關係ナキモノトス尤モ契約ヲ  
 取消シタルトキハ既往ニ遡リテ其效力ヲ生スルニ相違ナキモ是レ唯取消權實  
 行ノ結果ニ外ナラス之ヲ以テ直チニ契約ノ效力ニ關スル法律行為ナリトスル  
 ハ其當ヲ得ス然リ而シテ契約ノ效力ヲ釋明シ又ハ取消權ノ有無ヲ判定スルニ  
 ハ契約當時ノ法律ニ由ルヘキハ論ヲ俟タスト雖モ契約ヲ取消ス方法ノ如キハ  
 所謂方式ニ屬スルモノナルヲ以テ取消權ヲ行フ當時ノ法律ニ從フヘキハ當然  
 ノ條理ナリ」ト(大審院明治三十四年四月二十四日第二民事部判決取消)  
 ○白耳義國ノ資本額 白耳義國ハ面積千九百十方里ニ過キナル小國ナレト  
 モ頗ル富裕ナル國ニシテ其現資本總額二百五十億フラン餘ニシテ其歲出額三

億フランヲ超エ其露國ニ向ヒテ投下シタル資本額ハ七億二千九百四十萬二千  
 「フラン」ニシテ技師ノ同國ニ行キテ生産ニ從事セル者千三百三十七人ナリト云  
 フ

○懸賞討論問題 來ル二十三日午後一時本校ニ於テ開會スル懸賞討論會ノ  
 論題左ノ如シ

- 豫算ノ成立ニハ裁可ヲ必要トスルヤ
- 同問題ハ岡法學士ノ發題ニ係ルモノニシテ當日ハ主論者トシテ副島法學士及  
 ヒ竹井法學士ノ二講師出席セラルル豫定ナリ
- 日英協約 政府カ去ル十二月帝國議會ニ報告セラレ且官報號外ヲ以テ公  
 示セラレタル日英協約ハ實ニ國際法研究ノ好資料タルノミナラス實ニ東洋ノ  
 平和ニ關スル一大盟約タリ今其全文ヲ左ニ掲ク

日本國政府及大不列顛國政府ハ經ニ種更ニ於テ現狀及全同ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ清帝國及露帝國ノ獨立ト領土  
 保全トヲ維持スルコト及該二國ニ於テ各國ノ工業ヲ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ協ニ利從關係ヲ有スルヲ以テ  
 茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條 兩締約國ハ相互ニ清國及露國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ該二國孰レニ於テモ全權臨時酌定ニ則セラルルコトヲ  
 三



第三條 若シ日本國又ハ大不列強國ノ一方カ上記各ノ利益ヲ防礙スルニ於テ別國ノ暗躍ヲ阻テ至ルニ至ル時ハ他ノ一方ノ締約國ハ最正中立ヲ守リ併セテ其國盟國ニ對シテ他國方交戦ニ加ヘルヲ妨クルコトニ努ムヘシ

第三條 上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國又ハ數國方該同盟國ニ對シテ交戦ニ加ル時ハ他ノ締約國ハ來リテ援助ヲ與ヘ協同ニ努ムルニ當ルベシ

第四條 締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經スシテ他國ト上記ノ利益ヲ害スルヘキ別約ヲ爲サズルヘキコトヲ約定ス

第五條 日本國若クハ大不列強國ニ於テ上記ノ利益ヲ妨礙スル時ハ兩國政府ハ相互ニ充分ニ且ツ隔離ナクテ報告ヲ送リテ

第六條 本協約國印ノ日ヨリ直ニ實施シ該日ヨリテ簡年同效力ヲ有スルモノトス若シ右五箇年ノ終リ至ル十二箇月前ニ締約國ノ孰レモ本協約ヲ廢止スルノ意思ヲ通告セザル時ハ本協約ハ締約國ノ一方カ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス然レトモ右終リ期日ニ至リ同盟國ノ一方カ現ニ交戦中ナル時ハ本協約ハ締約國ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス

第七條 締約國ハ締約國ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス

第八條 締約國ハ締約國ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス

第九條 締約國ハ締約國ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス

第十條 締約國ハ締約國ノ終リ至ル迄ハ引續テ效力ヲ有スルモノトス

十一月九日 二月一日 二月二十日 運動ニ於テ本書二冊ヲ作ル

# 法學志林

第二十八號

二月二十日發行  
 每月一回二十日發行○定價一冊金拾錢郵稅壹錢  
 校友、生徒、校外生ニ限リ特價一冊金八錢郵稅壹錢  
 拾冊則金七拾錢郵稅拾錢

○民法第七百四十九條第三項ノ場合ニ於テハトシテ得ルカ	法學博士 梅謙次郎
○親交又ハ繼母ト繼子トノ間ニ於ケル婚姻ノ禁制列	法學博士 仁井田直太郎
○臺灣ノ婚姻法ニ就テ	法學博士 李平野
○交戦團體ノ承認及ヒ其國際公法上ノ地位	法學博士 秋山雅之
○取立委任ノ解除ト裏書及ヒ信憑請求權	法學博士 富谷銜
○國席判決ノ場合ニ於ケル刑ノ時効ト公訴ノ時効	法學博士 尾直
○國席判決ノ確定ト刑期ノ起算	法學博士 豊島直

發行所 東京市麹町區富士見町六丁目 司法省指定 和佛法律學校  
 (電話番町一七四) 文部省認定

記事 講談會外二件  
 雜報 日英協約外十一件  
 解疑 大審院新判決七十二件

### 校外生規則摘要

一 講義錄ヲ分テテ第一學年、第二學年、第三學年ノ三部トス

一 講義錄ノ掲載科目左ノ如シ

第一學年 法學通論、民法(第一編及第二編第六章マテ)、刑法(總論)、憲法、國際公法、經濟學  
第二學年 民法(第三編)、商法(第一編、第二編、第三編)、刑法各論、民事訴訟法(第一編、第二編)、刑事訴訟法、財政學  
第三學年 民法(第三編第七章以下、第四編、第五編、商法(第四編第五編)、民事訴訟法(第三編以下)、破産法、行政法、國際私法

一 講義錄ハ毎月六回左ノ期日ニ發行ス

第一學年 五日、二十日、第二學年 十日、廿五日、第三學年 十五日、三十日(但二月ニ限リ末日)

一 校外生ハ何時ニテモ入學スルコトヲ得

一 月謝金左ノ如シ

第一學年 金三十錢 第二學年 金四十錢  
第三學年 金五十錢 金學年 金一圓  
月謝ハ郵便爲替、銀行小切手、通滙單等便マ  
以テ東京市麴町區富士見町六丁目十六番地  
和佛法律學校會計局宛ニテ送付スヘシ

明治二十二年十二月九日內務省許可  
明治三十四年十一月四日第三種郵便物認可

明治三十五年二月二十日印刷  
明治三十五年二月廿一日發行  
(定價金貳拾錢)

編輯者 松田久次郎

發行所 東京市牛込區東横町十七番地

印刷者 東京市牛込區矢來町三番地

印刷所 小宮山信好

東京市芝區西ノ久保明倉町十一番地

印刷所 金子活版所

東京市麴町區富士見町六丁目十六番地

發行所 司法省 和佛法律學校

指定 電話番町百七十四番